

「親密な生活」の市場化

—適応と抵抗—

鈴木 和 雄

はじめに

かつて高橋洋児は、現代の商品経済化現象をつぎのように特徴づけた。商品経済の人間生活への浸透の結果、「従来は非商品経済的な形で行なわれていたさまざまなものも、商品として購入されるとか、業者にまかせるという形をとることになる。…なかでも教育・医療・セックスの三分野で現在進行している事態は、いまや人間の精神も身体も丸ごと商品経済漬けになっていることを端的に示す」（高橋，1988:60）¹⁾、と。

高橋は「教育・医療・セックス」という人間の精神と身体の次元に言及して、商品経済化の極限を示唆したが、生活過程の商品化の進行は他の左派系理論家も強調していた。たとえばブレイヴァマン（1978:第13章）は、テイラリズムによる大量生産体制の確立が「普遍的市場」をもたらし、このもとでコミュニティと家族が決定的に市場に従属するようになると主張し、アグリエッタ（2000:98,177）は、フォード主義的労働過程が「大家族の内部や隣人関係のあいだに確立していた」「非商品関係にたいする商品関係の支配によって特徴づけられる」新しい消費様式を創造して、「消費様式を構造化しなおす」ことを強調した。

その後の資本主義の発展のなかで、生活過程の市場化が人びとにどんな

1) 以下、引用文中のゴチック強調は原著者のもの、傍点強調と省略（…）は鈴木のもの。

影響をもたらすかを論じた新たな研究が現われた。本稿が検討するA.R.ホックシールド『アウトソースされる自己』(Hochschild, 2012)²⁾である。この本はその副題が示すように、人びとの内面にかかわる「親密な生活」を市場サービスが代替するとき、人びとの生活にどんな影響が生ずるかを考察する。この考察を資本主義の発展とのかかわりでいえばつぎのようになる。資本の本源的蓄積過程によって人びとの共同体的関係は解体されるが、自己をアウトソースするとは、解体過程がさらに進んで共同体的関係(「親密な生活」にふくまれる関係や行為)が市場的代替物(とくに有料サービス)によってさらに代置されることを意味する。この代置は新自由主義が登場する1970年代から格段に強化され、人びとは市場化から自分たちを守ろうとすればするほど市場に頼らざるをえない、という悪循環におちいった。

ホックシールドが考察するのは、危機的状況にあるアメリカの家族と、家族に有料サービスを提供する業者との関係である。市場化過程を両方の側から検討して、人間生活の内面的な関係や行為が市場サービスで代替されるさいの影響を考察しようというのである。

本稿の目的は、彼女の分析に依拠して「親密な生活」に市場的関係が浸透するとき、市場的関係が親密な生活にどのような緊張をひきおこすかを具体的にあきらかにして、市場的関係と非市場的関係の対立に検討を加え、あわせて彼女の分析を全体的に評価することにある。本稿の考察順序を示しておく。まず彼女の問題関心を紹介し、本稿が彼女の著書にアプローチする仕方をのべる(第1節)。ついで彼女の中心的主張を、(1)「親密な生活」の市場化へのミクロ的動因(第2節)、(2)市場による「親密な生活」の歪曲ないし制限(第3節)、(3)「親密な生活」の市場化にたいする適応と抵抗の形態(第4節)、に集約して検討を加える。さらに以上を基礎に、彼女の分析の問題点を論じ(第5節)、最後にまとめとして、彼女の分析の

2) 以下、本書の引用・参照箇所の指示にさいしては煩瑣をさけ、(123)のように原著頁数のみを記す。

意義と今後の展望を示す。

第1節 問題の所在

まず『アウトソースされる自己』におけるホックシールドの問題関心と問題設定を提示し、本稿が彼女の著書にいかにかアプローチするかをのべる。

1. 共同体的関係〈対〉市場的關係

[1] 本書の主題は、「親密な生活」に内在する共同体的関係を有料サービスとしての市場的代替物で置き換えるさいに、いかなる事態が出来るかにある。「親密な生活」とは、後述するように、人びとの内面的世界としての共同体的生活とそこでの関係や行為を意味する。それらを市場的代替物で置き換えるさいに生じる事態とは、共同体的な非市場的關係に市場的關係が侵入するとき、共同体的生活を脅かす緊張がいかにもたらされるかという問題である。端的に言えば、共同体的關係のなかに市場的關係が入り込むさいにひきおこされる軋轢の問題、共同体的關係〈対〉市場的關係の対立の問題、である。

「序論」で共同体的關係と市場的關係が対比される。共同体的關係は、ホックシールドの幼少期の、アメリカ東海岸メイン州ターナーの村の農場での経験として、市場的關係は、父親が中東のアメリカ大使館代理大使だった12歳時の彼女の生活として、記述される。村では世帯タスクは家族が担ったが、大使館では家族は何もせず、すべてはコックなどの使用人がおこなった。村では農作業をつうじて家族やコミュニティとのつながりがあったが、大使館生活ではそれが消えて、隣人、友人、家族のための行為は市場で獲得された(4,6)。

長年ターナーで生活したホックシールドのおばは、村の關係を「ただやるだけ just do」として特徴づけた。必要なとき、村民は自分が他人を助けたいかどうかなど考えもせず「ただやるだけ」だった。これは、「贈与の精^{ギフト}

神」(M.モース)をもとに、相互信頼に依拠して互助的に物や人手を都合しあう関係であり、コミュニティへの道徳的義務を意味した(6-7)。「ただやるだけ」は、市場の関係とは対照的な共同体的関係だった。

[2] 市場サービスが家族内に侵入してくるマクロ的要因には、つぎのものがあつた。(1) 共同体的関係の衰退、(2) 企業間競争の激化への企業の新自由主義的対応の結果、職場と家庭が不安定化したこと、(3) 女性の労働力参加と離婚の増加によって家庭内のケアの担い手が消失したこと、(4) 新自由主義的政府による公的サービスの削減、である。

(1) まず産業構造が変化して農業が縮小し、都市への人口移動が生じて共同体的関係が衰退した。(2) 1970年代以来職場と家族が不安定化した。グローバリゼーションのもとで競争激化に直面した企業の新自由主義的対応の結果、絶え間ないレイオフ・ダウンサイジング・合併・リストラのもとで長時間労働が一般化し、長期雇用が消失した。安定的雇用は特権者に限定され、臨時労働者がふえて人材派遣会社が急成長した(7-8)³⁾。これが家族の基盤をゆるがせた。(3) 家族は、女性就業と離婚の増加によっても自立性を失った。女性就業の増加によって子供をもつ共働き世帯がふえ、また離婚が増加してシングルマザーがふえた。そこで子供、病人、老人の面倒をみる者がいなくなった⁴⁾。(4) 家族は、新自由主義のもとで公共サービスを削減してきた政府にも、非営利の保育園や老人ホームにも、頼れない(8-9)。以上の要因に、次項でみる(5) サービスのテクノロジー利用と(6) グローバル化がつけ加わる。これらが結合して生活過程への市場サービスの侵入が加速する。

3) 以上が、1980年代のアメリカで、アメリカ型大量生産体制の危機に直面した戦後企業体制の再編の一環をなしたことについては、河村(2003a:第6章;2003b:68-72)をみよ。

4) 『セカンド・シフト』は家族の危機の根本問題をつぎのようにとらえた。「女性たちが大量に経済に組み込まれていっているのに、この変化をスムーズにするような労働と結婚についての文化的な条件がそれにともなっていない」。労働する人も女たちも変わった。「しかし…労働現場は…柔軟性に欠けたままである。…家族においては…男性が女性の変化に…対応できていない」、と(ホックシールド, 1990:18)。

人びとはいまやチャイルドケアやホームヘルプについてはもちろん、個人的トレーナー、イベントプランナー、ライフコーチ、犬の散歩代行者を雇用する。かつてのエリートむけ個人サービスは中流階級にまで拡大された(10)⁵⁾。

2. 有料サービスの特徴

[1] 市場サービスは大衆化されただけでなく、(1) 専門化され、(2) テクノロジー化され、(3) グローバル化された。(1) の例として老人養護ホームと葬儀をみよう。女性就労が増加する1970年代に、老人ケアは家族や召使いから専門家の手に移行する。現代の老人養護ホームでは、メイド、キャフェテリア労働者、看護師、看護助手、医師、インターン、病院総合診察医、理学療法士、ソーシャルワーカー、ホスピス労働者、私的訪問看護労働者、老人病ケアマネージャーなどが専門サービスを提供する(199)。

葬儀も専門化して多様なサービスが提供される。①死者のパーソナリティを表わすフットボールヘルメット形の骨つぼや、テディベアのついた遺骨袋や、カーレースをテーマにした棺などの提供、②遺骨の月軌道への打ち上げ、③海面下20フィートの遺骨容器による人工サンゴ礁の形成、④狩猟家の遺骨を弾薬に詰めた銃の発砲、⑤遺骨の花火での打ち上げ、⑥遺骨を入れたロケットやペンダントの製作、などだ(213,215)。

[2] (2) テクノロジー化では、有料出会い系サイトはインターネットを使ってクライアントを恋愛探索に誘う。商業的代理母サービスでは、人工受精や受精卵移植の生殖テクノロジーを使って、代理母が不妊の主婦などの赤ん坊を身ごもる(11)。

(3) グローバル化では、サンフランシスコのアメリカ人がインドの会社にeメールして駐車場を探し、アメリカの学生は1時間20ドルでインドの

5) だから有料サービスの購買層は「上層部の管理職」で、「工場労働者」の「家族のニーズ」を満たすのは家族か働く女性である(ホックシールド, 2012:263;1990:290-291もみよ)。

会社の家庭教師に教えを乞う(11)。アメリカの葬儀チェーンは、葬儀の請求書作成をインドの労働者にアウトソースする(213)。アメリカとカナダのカトリック教会は、魂が天国へ昇るのを助けるミサの祈りである「ミサの意図 Mass Intentions」を、バチカン経由でインドのカトリック教会に依頼し、インドの司祭がアメリカなら平均5ドルで、インドの現地語で祈りを唱える(215-216)。代理母出産ではインド政府は、第一世界のクライアントをインドに誘う(84)。インドの不妊治療クリニックはアメリカ人クライアントをもち、ジョージアやウクライナ出身の女性から販売めあてに、肌の白い青い目の卵子を採取する(101)。ケア労働では、アメリカのナニーとメイドの約4分の1が外国生まれの女性だ。女性ケア労働者の5つのグローバルな流れがある。第1は中央・南アメリカからアメリカとカナダにむかい、第2は南アジアから香港、韓国、日本にむかう。第3は、南アジアからペルシャ湾に、第4はアフリカから南ヨーロッパに、第5は東ヨーロッパから西ヨーロッパに、むかう(154)。

3. ホックシールドの問題関心と本稿のアプローチ

[1] 以上が現代の市場サービスの特徴だが、ホックシールドはその最大の革新を、以前は市場から遮蔽されていた感情的生活の核心に達するサービスの増大にある、とみる。この「親密な生活の商品化 *commodification of intimate life*」が、見過ごされているが大きな現代のトレンドをなす。突き詰めれば、自己の内面的世界の商品化は、「市場が、自己についてのわたしたちの理解そのもののなかに侵入していることを意味した」(11-12)。

かくして中心問題が提示される。「わたしは、わたしたちが、個人的行為を…誰かにアウトソースするとき、わたしたちがおこなっていることは何なのか、という意味を理解したかった」(12)。「親密な生活」の商品化の意味を理解するために、彼女はさまざまな有料サービスを提供する人びと、また彼/女らから有料サービスを買う(彼/女らを雇う)クライアント、そしてそれぞれの関係者にインタビューをくり返した。

みえてきた事実は、クライアントが「いかに、一方では家族、友人、隣人に頼りたいという願望と、他方では専門家の保証の必要と闘っていたか」(12)ということだった。人びとは、親密な生活を維持するために共同体的関係を頼りたいのだが、それが消失しているために有料サービスを必要とするという相克に苦しんでいた。ここから「本書は、自己 the self を商業化する市場の圧力と、わたしたちがこの挑戦を受け入れ、抵抗し、これに取り組む仕方」を探究する、という課題が設定される(14)。すなわち、人びとが市場的關係を、あるいは受容し、あるいはそれに抵抗しようとする葛藤の、具体的様相の追求である。

[2] 市場的關係〈対〉共同体的關係の緊張の解明が本書の課題をなすが、「わたしが本書を駆り立てるジレンマと対面するようになったのは、おばのエリザベスをつうじて」(14) だったと述懐するように、この課題をホックシールドの目の前で具体的に突きつけていたのがおばの存在だった。このおばは「序論」に登場し、断続的にいくつかの章(1章, 3章, 9章など)で言及され、最終章「結論」でその生涯の最期がのべられて本書が閉じられる。彼女は本書全体を覆う存在である。なぜか。

おばは、人生を東海岸メイン州ターナーの田舎町で過ごした。小学校教員で、結婚歴があったがその後寡婦になり、94歳で病気が重くなり要介護状態になる。ホックシールドの両親は彼女を助けようとしたが、「助けは要らない！」と頑強に拒む。両親が死ぬとおばの面倒をみる責任はホックシールドにかかってきた。メイン州には「ただやるだけ」の精神が残っており、隣人たちがおばを助けた。だがついに衰弱して病院に運ばれ、脱腸が発見されて手術をうける。子供がなく身体が不自由な彼女を助ける者はなかった。ホックシールドは自分の住む西海岸への転居を勧めるが、拒絶される(13-17)。

おばは、「ただやるだけ」の古い共同体的世界に生きる人間だった。しかし自分がケアを必要としたとき、自分を助けるはずの共同体的世界は衰弱して頼ることはできなかった。市場的ケアをもとめるほかホックシールド

に途はなかったが、おばは自宅に他人を入れることを拒否して市場的ケアを頑としてはねつける。しかし結章で、ホックシールドがやっとみつけた、おばと同居してやさしくケアしてくれる女性介護士と出会い、昔からの隣人や知人に囲まれながら、故郷ターナーで98歳の安らかな死を迎える。

このおばは共同体的世界の具現者なのだが、自身の危機にさいしもはや共同体的関係を頼ることができず市場的ケアしか客観的にもとめられなくなっている。その意味でこのおばは、市場〈対〉共同体の緊張を一身に象徴する存在なのである。

[3]『アウトソースされる自己』は、「序論」と「結論」を除くと14章から構成され、各章ではほぼアメリカを舞台に、「親密な生活」を他人に代行してもらうクライアントと有料で代行するサービス提供者との関係がインタビューをもとに考察される。とりあげられるサービス提供者とクライアントは、出会い系サイトの恋愛コーチ（1章）、ウェディングプランナー（2章）、カップルセラピスト（3章）、代理母出産のクライアント（4章）、代理母自身（5章）、母親業の諸タスク代行者（6章）、バースデープランナー（7章）、父親業のコンサルタント（8章）、外国人ナニー（9章）、世帯管理者（10章）、介護士（11章）、家族や友人の役割代行者（12章）、老人ケアマネージャー（13章）、葬儀サービス業者その他（14章）、ウォントロジスト（「結論」）、と多彩である。

章の配列順序がおよそ、男女交際→結婚→出産→母親業・父親業→子育て→老人→葬儀、というライフコースにそったサービス業になっていることはあきらかである。各章のサービス提供者とクライアントの関係、それへのホックシールドの評価は複雑で微妙なばあいも多く、これが各章の要約自体を困難にする。また各章があつかう共同体の関係〈対〉市場的关系の緊張の性質はサービスによって異なり、しかも緊張関係を考察する各章間の配列が体系立っているわけでもない。だから各章の要約を並べても本書の全体像はみえない。だが広範囲のサービス業の当事者たちの対応とそれへの著者の洞察が本書の中心内容をなすので、その検討を省けば本書の

根幹部分が素通りされる。彼女の見解を包括的に評価するにしても、その評価は、彼女による事実関係の分析を欠落させた皮相なものとなる。

そこで本稿は、著者の問題意識を的確に示すと思われる3つの論点を抽出し、それらを検討するなかで特定サービスの提供者とクライアントの事例を例解として利用するという仕方、「親密な生活」の商品化における著者の事例研究の成果を紹介してみたい。著者の問題意識を示すとわたくしが考える3つの論点とは、(1) どのようなミクロ的動因によって「親密な生活」の市場化が押し進められるか(第2節)、(2) 市場化されることで「親密な生活」はいかに歪曲または制限されるか(第3節)、(3) 人びとは市場化をいかに受容し、あるいはそれに抵抗するか(第4節)、である。

第2節 「親密な生活」の市場化へのミクロ的動因

前節で1970年代以来の「親密な生活」の市場化のマクロ的諸要因をみたが、本節では、市場化へのミクロ的動因を考察する。

1. 有料サービス受容の理由

[1] 有料サービス受容の理由としてホックシールドは、(1) 専門性(能率と洗練)、(2) 適切さの保証、(3) 比較優位の原則の信奉、(4) サービス購買者の提供者への無関心、に言及する。

親密な生活に代置されるサービスが購買されるのは、第1に、プロによる的確で洗練されたサービスの提供がクライアントの能率的な目的達成を可能にするからだ。たとえば有料出会い系サイトは、かつて共同体的関係のもとで結婚相手と自然に出会い、衆目の前で求愛するといった悠長さを省いた専門サービスを提供する。ホックシールドがインタビューした49歳の女性クライアント(グレース)も、フルタイムで働き家事もこなすので恋愛相手を探す時間がなく、有料出会い系サイトにむかう(21-22)。サイトにアクセスし、中位レベルの1,500ドルのコースを契約して月17.99ドル

で登録する。つぎに恋愛コーチの指導のもとで自分のプロフィールを書く（①自己宣伝用写真の選別，②魅力的なユーザーネームの作成，③心を捉える件名の考案）（22-23）。プロフィールと写真を提出し，eメールの件名を書き submit をクリックする。プロフィールが載ると，レスポンスはあふれ数日ごとに数百ページのeメールが届いた（26-27）。コーチに指導された自己宣伝は成功した。

プロのサービスに負けた男の経験がある。この男（マイケル）は，バースデープランナーを断って5歳の娘のバースデーパーティを自分で計画した。自分でケーキを注文し，ゲームのセットを買い，風船とりボンで部屋を飾り，ゲームを計画し，衣裳を着けて自分自身で余興を演じた。しかし彼が演じた余興はみごとに失敗した。娘の学校友だちの少女たちは，プロのプランナーが用意するゲームに慣れていたので，父親の下手な余興に戸惑い，シラけてしまった。台所から様子を見ていた隣家の女性はいった，「マイケル，プロに任せなさい。彼らは5歳児がおもしろがることを知ってるわ。…醜態をさらさないで。彼らに任せるのよ」と。落胆した父親はこの言葉が正しいと思った（124-126）。

つまり，プロのネイモロジスト nameologist [親が子供に適切な名前を選ぶのを助ける人—鈴木]は素人が家系図からみつけるよりも縁起のよい名前を見つけ，プロのおまる訓練者は素人よりうまくおまるをしつけ，ウェディングプランナーは素人より盛り上がる結婚式を約束し，旅行プランナーは素人よりのんびりした休日を約束する（223）。

[2] 第2に，プロの有料サービスは，①クライアントに自分たちの企画やふるまいが「適切」だという保証をあたえ，②クライアントを社会的規範に従わせる。

ある女性ウェディングプランナー（クロウイ）は挙式予定のカップルから，結婚式が大声をあげて騒ぐ大みそかのパーティに似てしまって大丈夫か，式を厳粛な教会の儀式のようにする必要はないか，と訊かれた。カップルは自分たちの結婚式の適切さの保証を彼女にもとめた。球形チューイ

ンガムの指輪交換はおかしいかと訊くカップルや、式当日部屋にCの飾りをつける提案に同意をもとめるCohenという名前の新郎もいた(50-51)。

プランナーには、クライアントの風変わりな嗜好を放棄させ、適切な形式を説得する役割もあった。ある花嫁は屋根裏部屋のような挙式場所を望んだが、プランナーは不適切と判断してあちこちの屋根裏部屋をみせた。またプランナーの企画では彼女は王女になる必要があったので、プランナーはブライダルショップで王女のウェストドレス〔腰にくびれがあるドレス—鈴木〕を試着させ、それがあなたのドレスだと勧めた(51)。

[3] 第3に、比較優位の原理で有料サービスを正当化する女性もいた。2人の息子がいて、国税コンサルタント会社で確定申告の仕事をする35歳の女性(エープリル)は有料サービスの大ファンで、多くの母親仕事をアウトソースしていた。ナニーを雇い、適切なサマーキャンプ・自転車トレーナー・子供のお抱え運転手・男の子をケアする女性、をみつけるコンサルタントも雇う、サービスモール=サービス市場の常連客だった(105)。

常連客になった理由は、彼女が、家庭内のタスクにも分業における比較優位の論理を適用して、自分はずっと得意な確定申告業務に集中して、母親仕事はできるだけアウトソースすべきと考えたことにある。ホックシールドには、彼女は家庭管理の領域に企業的アプローチをもちこんでいるようにみえた(106-108)。

比較優位の考えは、家庭内タスクをアウトソースする一般的な論理かもしれない。

[4] 第4に、サービス購買者が提供者側の事情に無頓着で無知なことも、有料サービス普及の理由をなす。市場交換では一般に商品自体が問題であり、買い手は商品を誰がいかなる事情のもとで生産したかには無関心である。親密な生活を代替するサービスでも、この事情がサービスを普及させる。代理母と外国人ナニーのクライアントをみよう。

第1の例では、不妊に悩むアメリカ人夫婦(リリーとティム・メイスン)が体外受精がうまくゆかず代理母出産にむかう。当初、夫の兄の妻と友人

の妻が代理母に同意してくれた。赤の他人に依頼する方法もあった。問題は費用で前者なら総額5万ドル、後者なら8万ドルと予想されたが、インドの代理母出産なら1万ドルですんだ。夫はオンラインでインドのクリニックをみつけ代理母出産を決める(76-77)。夫婦は「子宮貸し」を代理母の人権侵害と考えなかったし、臓器の闇市場売買と同じとも思わなかった。代理母出産はインドの貧しい代理母を経済的に助けるので、夫婦は代理母との取引を「相互に利益のある取引とみなしていた」(83)。だがもちろん、ほとんどの代理母の「選択」は「強制された非自発的行為」(100)であり、そこには彼女たちのつらく悲しい経験がひそんでいた。

第2の例は、アメリカ人夫婦によるフィリピン女性ナニーの雇用である。ある夫婦(デイヴィッドとアリス・テイラー)は共働きで、赤ん坊を出産した。そのケアをするナニーを探して、運よくフィリピン人ナニー(マリチェル)をみつけた。

夫婦は、不法滞在で貧しい彼女がフィリピンの家族に送金するのを知っていたので、十分に支払うといった。快活で、リラックスしていて、我慢強く、優しい彼女のもとで、夫婦は赤ん坊が健康に育っていると思った。故国での彼女の生活は知らなかったが、妻は、故国の家族は伝統的な村に住み、互いに助けあい、昔ながらの精神で生きている。それが、彼女が生まれつき我慢強くリラックスしていて、赤ん坊に愛情を注げる理由だと思った(146-147)。これは完全にまちがっていた。

夫婦は、彼女がフィリピンの村生活に典型的な母親のようにふるまい、「本物の」フィリピン流のしつけをしていると考えたが、このふるまいは彼女がアメリカのテレビのトークショーから学んだものだった。赤ん坊への愛情もフィリピンの村生活に由来するものなどではなかった。第1に、彼女には子供をフィリピンに残した寂しさがああり、赤ん坊の世話に自分の子供への思いを重ねていた。第2に孤独があった。言葉の壁と車を運転しないため彼女には話相手がおらず、唯一の救いが赤ん坊だった(151-152)。

ホックシールドは、外国人ナニー問題における、北の母親たちの能天気

な幻想を辛辣に批判する。グローバルな南から北への、ナニーやメイドやチャイルドケア労働者としての移民の増大に言及して、南の諸政府が新自由主義的な市場の規制緩和をせまることで土着の旧来の市場を破壊し、住民の窮迫と北への移民を促進している事情を論じる。他方、北では女性雇用の増加、中流階級の長時間労働、公共サービスの削減が、移民のサービスへの需要を増加させた。しかし移民の雇主たる北の母親たちは、世界のマリチェルの物語を神話に置き換える。雇主（アリス）は、ナニーたちの故国の悲惨な状況に無関心で、南の人びとはアメリカ人がいまでは失った伝統的で理想的なリラックスした生活をしていると勝手な想像をめぐらす(154-155)。ホックシールドは言及しないが、これは、代理母出産のクライアントが代理母たちの真実をみないのとよく似た状況である。

北のクライアントがみていないのは、遠い故国での資本の本源的蓄積で生活基盤を失った女性が、移住先のアメリカでナニーとして雇用先をみつけるという本源的蓄積のグローバル化の事実である。この本源的蓄積のグローバル化の事実そのものは、「親密な生活」のアウトソース化にむかうマクロ的要因につけ加えるべきかもしれない。

2. サービスとクライアントの規格化と企業化

[1] 有料サービスの市場的で規格化・量化された性質も、「親密な生活」の市場化への動因となりうる。有料サービスは量や質で値段が異なる。あるオンラインデートサービス会社には、料金の異なる「基本」「プレミアム」「VIP」の3つの恋愛コーチパッケージがある。「基本」では、クライアントがプロフィールを書くのを助け、オンラインデートやその後の実際のデートの仕方をアドバイスする。「プレミアム」は1ヶ月のプライベートコーチをふくみ、「VIP」では4ヶ月にわたる16時間のコーチがつけ加わる(23)。

さらにある男性恋愛コーチは、女性クライアントにたえず企業的思考をうながした。たとえば「あなたは自分の愛の人生のCEOなんです」といい

(13)、別のコーチは「あなたはよいROI [Return on Investment 投資収益] を得ている」といった。その意味は、恋人探して投資してきた金と時間の収益は、クライアントがうけとる高質のレスポンスの量で測れることである (27)。企業化されたサービスが「親密な生活」の市場化を促進する。

[2] 第2に、デート会社はクライアントをも規格化し点数化する。35歳の男性恋愛コーチ (エバン) は49歳の女性 (グレース) に、プロフィールで本当の自分を示すようにいった。女性はそうしたが、彼は「外れすぎている」といった。彼女にもとめたのは「本当すぎる」自分ではなく、本当の自分の破片を編集した「平均的な」自分だった。「本当のあなた」は本当すぎるあなたの抑圧を必要とした (24-26)。同じ理由で、アメリカ第2のデート会社は、身体的疾患や3度の結婚歴をもつ、またゲイの、会員を認めない (37)。

さらに恋愛コーチ (エバン) には、クライアントを1-10点で評価する査定システムがあった。10点の女性は24歳で結婚歴がなく、セクシーな36-24-36のスタイル、ニコール・キッドマンのような顔、暖かいパーソナリティ、成功したキャリア、グルメ料理法への好み等をもつ、というように。あるクライアント (グレース) はとてもきれいでセクシーだったが、歳をとっており (49歳)、離婚歴があり、グルメ料理法のための時間もなかったもので、おそらく6点だった。だが点数は浮動的で彼女が50歳になってプロフィールを更新したとき、「靴下の値段のように、一晩でわたしの評価は半分下がっちゃった」。1日たったら「わたしは3.5点よ」と (28)。ときに恋愛コーチは点数化とは反対のことをいう。「覚えておいてください、あなたは数じゃないんです、個性的なんです」と。だがもちろん、「個性的」というのは市場にマッチした特徴であるにすぎない (13)。

提供されるサービス自体が、クライアントの露骨な点数査定をふくむこともある。「ファミリー360」は、大企業の多忙な幹部によい父親となる仕方をコーチする。クライアント (父親) は、「ファミリー360」のコーチと一緒に家族会議を召集し、家族構成員は55項目の質問票を渡される。質問

項目は、『愛してるよ』をひんぱんにいうか」とか「怒ることなく問題を解決するか」とかである。家族全員が各項目について1から7の点数で父親を査定する。父親は全員の回答を集め、55項目すべての平均を計算する。父親は低い点数を反省するようもとめられ、コーチに助られて「アクションプラン」を作成する。たとえば「夕食のコミュニケーションのために、家族構成員の夕食の皿の上にあらかじめ選んだ質問を置いておく」とか「紙と封筒をブリーフケースに入れておき、家族構成員に短い毎週の手紙を書く」とかのプランである(131-134)。

こうして有料サービスではサービスが企業化され、クライアントも規格化・量化されて、「親密な生活」の市場化が押し進められる。

3. 市場への依存の、連鎖的、累積的な循環効果

[1] 市場への依存は、連鎖的、累積的に深まっていくという循環効果をもつ。

プロのサービスは見栄えもよいし、配慮も行きとどいている。先の、娘のバースデーパーティをプランナーに頼らず自分で計画しようとして失敗した男(マイケル)も、プロのサービスの優秀さを最終的に認めた。別の例もある。有料サービスに賛成する女性(エープリル)は、ある逸話を話した。彼女の学区の1年生と2年生は、学校で小教会の模型を作る課題を課される。親たちは、オーク材、より糸、ペンキなどの材料をジミーの店で買い、それらで子供は自作する。だがいまでは店は教会模型の部品キットを売るので、それを買って家で組み立てて学校にもっていく。この女性は考える。キットで作る教会の見栄えはいいから親たちはキットを買う。反対に手作りの教会をもって学校に行く子供は恥ずかしい思いをする。プロのサービスはキットで作った教会のようだ、と(113-114)⁶⁾。

6) ブレイヴァマン(1978:301)もいう。「スタイル、ファッション、広告、および教育過程」は若い世代に社会的慣習の圧力を加え、『自家製』をかっこうのわるいものに変え、『工場製』あるいは『店で買ったもの』を自慢の種に変える」と。

プロのサービスは優秀で洗練されているので、共同体的関係のなかの素人の行為は軽蔑される。子供へのおまるしつけ業者は、伝統的で非専門的なしつけを見下す(110)。インターネットの恋愛コーチは、オンラインではなく生身の人間の集まりでパートナーと出会う行為を「野生のデート dating in the wild」と軽蔑する。家族や友人のケアは「素人のケア」と侮蔑される(223)。ホックシールドはいう。サービスモールドは疲れて忙しい親たちを困難なタスクから解放したが、素人の努力を減価させ恥辱に変えた、と(114-115)。

[2]「親密な生活」の行為が軽蔑されコミュニティが衰退すると、その空隙を商品とサービスが埋める。プランナーを断って自分で娘のバースデーパーティを企画した男(マイケル)は、アメリカの社会と家族はコミュニティ喪失によって不安定化し、そこにビジネスがつけ込んで「物とサービスが空隙を埋める」と考えた。妻も同意して空隙の充填には限度がないという。「アメリカではわたしたちは、欲しい-欲しい-欲しい、買う-買う-買う、投げ捨てる-投げ捨てる-投げ捨てる、の文化のなかで暮らしてるのよ」と(123-124)⁷⁾。

市場への依存のために不安定化した「親密な生活」を安定化させようとして市場的手段に頼ることにより、ますます市場サービスへの依存が深まる過程を、ホックシールドは循環効果と呼ぶ。この結果、わたしたちはいっそう大きなサービスモールドこそ進むべき唯一の道だ、と確信するようになる(222)。

循環効果は、所得と時間の面から強められる。ホックシールドは、有料サービス賛成派の女性(グロリア)におけるパラドックスを指摘する。完全に有料サービスに依存するためにはもっと長時間働いてもっと多くの金

7) 「共同社会の共同社会の社会的および家族的生活が衰弱させられるにつれて、結果として生ずる隙間を埋めるために、新しい生産部門が生みだされる。そして、新しいサービスと商品が市場関係の形態で人間関係の代替物を提供するにつれて、社会的および家族的生活はさらにいっそう衰弱させられる」(ブレイヴァマン,1978:302)。

を稼ぐことが必要だが、長時間労働は、共同活動（ハイキング、ボランティア活動など）に使う時間を削減する。そこで共同活動時間の削減は、ますます共同活動の市場的代替物を増加させる、と（197）。

[3] 日常生活で市場的なものを頼り非市場的なものをあてにしなくなると、非市場的なものへの自信が失われる。だからサービス市場はあらゆる専門知識をもって、わたしたちの能力にたいする自信を奪う。ホックシールドは、わたしたちは競争を企業間のものであると考えるが、もっとも熾烈な競争は、市場と私生活との競争かもしれないという（223）。

自信喪失のゆえに、先にのべたようにクライアントは自分たちの行動の「適切さ」の保証をプロにもとめるのだが、この自信喪失を端的に示すのがウォントロジスト wantologist である。ウォントロジストとは、自分が本当は何を欲しているかを見つけるのを手助けする存在である。ある女性ウォントロジストの手法を紹介しよう。

ある女性は、小さな庭のある中規模の家に住むが、大きな庭付の大きな家が欲しかった。ウォントロジストは女性とつぎの会話をする。何が欲しいの？—もっと大きな家。もっと大きな家に住めばどう感じる？—落ち着く。ほかに落ち着くのは？—海の近くの散歩。海を思い出させる近所を散歩する？—そういう場所はある。散歩で何が好き？—水の音を聞き、緑に囲まれること。会話でウォントロジストは女性に真の願望を悟らせた。女性はいまの家の小部屋を植物で満たし、卓上に噴水を置くことで平安をみいだした（221）。

ホックシールドはコメントする。われわれは「もはや、自分たちをガイドするプロなしには自分たちのもっとも平凡な願望でさえ自信をもって確認できない」（222）。ウォントロジストは、われわれが自分たちの真の願望すらわからなくなるほど、いかに市場によって方向感覚を失わされているかを端的に示す存在なのであり、彼女が『アウトソースされる自己』の「結論」でウォントロジストを登場させた理由もそこにある。

4. 2つのサービス志向による市場化の促進

[1] ホックシールドは、サービスクライアントの2つの特徴に注目する。(1)「結果」を重視する者と、(2) 企業的思考を好み、過程をつうじてこれに馴化する者、である。

(1)は有料出会い系サイトのクライアントだ。ある女性クライアント(グレース)が驚いたのは、自分に交際を申し込んできた2人の男が恋愛の破局を気にせず、将来の恋愛に異常に自信をもっていたことだった。1人は、サイトには君のように(恋愛相手から)外れた女性がたくさんいるといい、もう1人は、サイトで君のような女性を見つけるのはかんたんだった。男たちにとって彼女は「棚に並んだ1ダースのシリアルの中の1箱だった」。2人は彼女を6点と査定したが、ある6点の女性は別の6点の女性と同じなので、ある6点を失っても別の6点をえられる。彼女はこれを極端な市場の論理とみた(28-29)。

男性恋愛コーチ(エバン)も、クライアントは買い物客と同じ行動をするとみていた。買い物客がラックを徹底的に調べ、次は…次は…次は…と探すのと同じように、彼/女らはデート相手を次、次、次とクリックする(32-33)。

ホックシールドはコメントする。クライアントが、恋愛関係の創造ではなく出来あいの「適切な恋人」の発見に集中する態度は、友人、家族、同僚労働者、隣人にたいする彼/女らの関係の貧しさを反映していた。彼/女らは、恋愛の創造者ではなく消費者になろうとしたのだ、と(41)。つまり、大量生産時代の消費者と同じく、クライアントは出会い系サイトに、恋人の「生産」ではなく出来あいの恋人の「消費」だけをもとめた。これは恋人探しに、「創造=過程」ではなく出来あいの「結果」だけをもとめる市場志向の現われだった。

[2] 第2の点をみよう。「ファミリー360」のクライアントは、量化可能で測定可能な、職場の能率向上と同類の実践を好んだ。ホックシールドは

「ファミリー360」のプログラムを、企業経営手法による子育てと評価する(140,143-144)。家族全員によい父親の55項目について点数で父親を査定させ、父親は低い点数を反省してアクションプランを作成するなど(132-134)は、企業の労務管理方式に酷似している。またこの方式は結果ではなく「結果にいたる行程」を重視する。家族の絆を深める行為がよき「行動 behaviors」や高収益投資という「行程」の観点から実践され、「父親資格の企業階梯をよじ登る」ように教唆されて、企業イデオロギーが家庭に浸透する(144)⁸⁾。

父親業のこの処方箋は、市場化圧力への新自由主義的対応として位置づけられる。20世紀のアメリカ人の理想的父親像は「分かちあう夫」や「参加する父さん」だった。しかし1970年代以後の厳しい企業環境は、労働時間を延長して従業員に最大量の時間・エネルギー・献身を要求した。そのためこの理想的父親像が維持できなくなった。「ファミリー360」は厳しい企業環境を所与と受け止め労働時間延長を是正せずに、よき父親である仕方をコーチする。だから「ファミリー360」は、家庭外の市場圧力への家庭内の新自由主義的対応なのだ(135)と、ホックシールドは的確な評価をあたえる。

ホックシールドが別々に論じる以上の2種類のサービスを好むクライアントを関連づけてみると、つぎのようにいえる。第1のサービスを好むクライアントはサービスに、過程ではなく「結果」をもとめる。そこで結果を重視するサービスが普及する。第2のサービスを好むクライアントは、過程の実践をつうじて企業主義イデオロギーを家庭に浸透させる。2種類のサービスは、異なる仕方で市場志向を強めるのである。

8) このいわば「職場による家庭の乗っ取り」(ホックシールド, 2012:309)を包括的に論じたのが、『タイム・バインド』である。

第3節 「親密な生活」の歪曲と制限

本節では、市場サービスの代替による「親密な生活」の歪曲ないし制限を考察する。

1. 有料サービスの秘匿と制限性

[1] 親密な生活を有料サービスで代替するばあい、サービス取引を他人の目からは隠しておきたいという心理が働く。たとえばインターネットで恋愛コーチを雇うばあい、クライアントはコーチを雇うことを恥と感じてこれを隠し、コーチのほうもクライアントの思いに配慮して取引を秘密に保つ。あるコーチ（エバン）は、「ええ、ぼくは彼女ら〔クライアント—鈴木〕の汚れた小さな秘密なんです」といった（23）。

これは、手製の料理と偽って出来あいの料理を提供するばあいと同じである。ある女主人は夕食に友人たちを招き、店で買ったおいしいローストラムをふるまった。友人たちは最初彼女の手製と思ったが、彼女に肉屋の名前をきいてそこで買ったので、すぐに彼女の嘘はバレた。嘘の理由は、フルタイムで働き子育てをしながら同時に、友人たちのために料理に時間をさく「十分にケアする」者の外見を維持することだった（192）。

[2] さらに、「お母さん、貸します」「お父さん、貸します」「お婆さん、貸します」「友だち、貸します」、といったサービスもこの種の秘匿をとまなう。「お母さん、貸します」サービスは、子供たちの学校からの帰宅を待ちクッキーを焼いてあげることをふくめて、「母親のやることすべて」を提供する。「友だち、貸します」は有料で友人のようにふるまって、一緒に夕食をとり、映画をみたり、旅行に行ってくれるパートナーを提供する（195）。有料サービス購入をクライアントはむろん秘密にする。

サービス購入を秘密にする理由が微妙なばあいもある。ある50歳の女性（ルイズ）は、離婚後車イス生活をする前夫を案じて、彼を買い物や歯医者者に連れて行くために、前夫とも共通の友人の女性（クリスティーン）を

密かに雇った。有償雇用が隠されたので、前夫とすくすくすることが、前夫にもクリスティーンにも「まったく同じ楽しみ」だという嘘を維持できた。女性の娘は、クリスティーンは30年間父親の友人だったのになぜ金をもらうのか、と嘘を非難した。だが女性から有料サービスを買っていることが前夫にも他人にも隠されたので、有料サービスに付着する脱人格化から個人的絆の親密さが守られた（191-192）。サービス購入が隠されたのは個人的で親密な絆の外観を守るためだった。

[3] サービス提供を他人の目から秘匿する必要がある、サービス提供者の側から生じることもある。まず、先の「お母さん、貸します」などの役割代行サービスでサービス提供を隠す必要は、クライアントの立場を考慮するサービス提供者の側でも生じるであろう。

深刻な理由から、サービスの提供者がその提供を隠さなければならないこともある。インドの不妊治療クリニックでは、人工受精した卵子を代理母たるインド人女性に移植する商業的代理母出産がおこなわれる。クリニックは代理母たちのほとんどを出産前からクリニックの寄宿舎に隔離し、食事等を管理された生活を送らせ、彼女たちが許可なく寄宿舎を離れることを禁じる。これは、一部は妊娠中の夫との性行為を禁じるためだが、自分たちが代理母出産することに賛成しない親類から身を隠すためでもある。ある代理母は、「夫のほかには、義理の母親しかわたしがやってることを知らないんです」といった（88-89）。

サービス提供が秘匿される事情は、提供されるサービスによってクライアント側にも提供者側にも存在するといえるが、その理由はほとんどのばあい、いずれか一方もしくは両方が、有料サービスに「親密な生活」を汚染する疚しさを感じるからであろう。

[4] また有料サービスは、「親密な生活」を制限的にしか代置できないことがある。3つの例をみよう。第1は、有料サービスの提供者とクライアントが親密になることを、市場関係が制限する例である。42歳のある女性（リズ）には、個人的問題を相談する有料の「3人の母親」がいた。彼女は

週に1度セラピストに、週に2度ジムのトレーナーに、隔週ごとにマッサージ師に（いずれも女性）、会う。結婚してはいたが彼女には片思いの教員がおり、彼との恋愛について3人に相談し3人から助言をうけていた（188-190）。

ホックシールドはいう。「プロバイダーにたいするリズの関係は、真っ先に金に依存しており、これが彼女らの親密さに微妙な制限を課した」と。第1に、リズは夫の昇給をマッサージ師に教えなかった。それは、彼女の料金引上げ要求を抑制するためだった。第2に、マッサージ師は聞き役で、自分についてはリズが十分と感じるだけしか話さなかった。それはマッサージ師が有料サービスの一部としてリズの話の聞いていたからか、とホックシールドがたずねると、リズも曖昧だった。この不確かさは、彼女が、友人関係が金で買えるのを知っていることを示していた（189-190; ホックシールド, 1990:291もみよ）。

第2は、先の離婚した女性（ルイーズ）が、離婚後車イス生活をする前夫の世話をしてもらうために、自分と前夫の共通の友人の女性（クリスティーン）を雇った例である。

ルイーズとクリスティーンは時給20ドルで合意したが、しかし時間をどこまでカウントするかは曖昧だった。前夫のいる養護ホームに最初に行った時、クリスティーンは3時間彼と一緒に買物し、2時間おしゃべりし、通勤時間は往復2時間だった。ルイーズは7時間分支払うと主張したが、クリスティーンは5時間分しか欲しくない、交通費も要らない、といった（190）。当事者双方が譲りあったので関係はこじれなかったが、逆に、双方の要求が衝突する可能性もある。そのとき市場関係が友人関係を制限するであろう。

第3は、肉親の親密な関係は断ち切れないが、市場サービスは終了できるという制限性を示す例である。ある女性老人ケアマネージャー（バーバラ）が、老いてパーキンソン病の女性海洋生物学者（ビクトリア）のケアを、姪から依頼される。ビクトリアはあまり歩けず話せなかったが、精神

は健全だった。生涯独身で子供もない彼女は孤独だった (203)。

バーバラは誠心誠意ケアする。しだいにビクトリアは外出に関心を失い、誘っても「どこにも行きたくない」と答えた。もはや彼女に喜びをあたえられないと知ってバーバラは打ちのめされた。姪が支払う1時間30ドルは十分な報酬だったが、彼女が人生から身を引くのをみるに耐えずバーバラは辞めた⁹⁾。数年後にビクトリアは死ぬ (204-206)。

他方、バーバラには離れて1人で暮らす糖尿病で盲目の母親がいた。小さい頃自分と兄に暴力をふるう父を傍観した母に、彼女は不信感があった。それでも母を放っておかず、自分の住むボストンの養護ホームに移した。死ぬ直前の6ヶ月のあいだに、母親と何とか理解しあうようになり、彼女は願っていた母親をみることができた (206-207)。

ホックシールドは、ビクトリアと母親へのバーバラの対応を比べて、市場サービスと親密な関係のちがいをのべる。バーバラは、ビクトリアのばあい睦まじかったが苦痛となった市場サービスを終了できたが、家族のばあいそうできなかった。市場サービスの関係は、サービス提供者の「選択」で打ち切れる点に制限性があるが、親密な関係は打ち切る選択ができない「義務」である、と (207-208)。

2. 「自分隠し」、提供者による感情的負担の代行、クライアント側での経験の喪失

[1] 親密な生活の代行サービスでは、(1) 提供者の「自分隠し」、(2) 提供者による感情的負担と感情労働の代行が、要求される。(2) は (3) クライアントの経験の喪失、をひきおこす。

(1) からみよう。世帯管理者 household manager として雇用される女性 (ローズ) は、富裕な家の家庭運営を助ける。仕事は、獣医への往復、子供の数学の宿題、自動車修理、美容師の予約、空港への送迎、などの手配や

9) 1時間60ドルならどうだったかと訊くと、彼女は「同じことだった」と答えた (204)。

奉仕だ。

ローズは、自分の仕事のもっとも重要なポイントが他人からみられないことにあるという。彼女がひきうける多くの個人的用事をうまくおこなうことは、クライアントが、有料サービスに頼るのではなく自分だけでそれらをおこなったかのように感じさせることを意味した。世帯がメイドやナニーなどにどんなに頼っていても、クライアントは自力でやっていると感じたいので、彼女たちが自分のために働いているのを他人に認めたくない。サービス提供者の側からすれば、これは自分と自分の役割を抹消するという「自分自身による自分隠し one's own self-effacement」の要請である(157-158)。自分隠しは、先にのべた有料サービス提供の秘匿ではない。雇主による有料サービス利用は他人に知られている。そうではなく、サービス提供における提供者の役割を他人の目から隠すことである¹⁰⁾。

[2] 雇主も、提供者とその役割を認めない傾向がある。ローズは5年間、午前7時から午後5時半までブラウン家に勤務し、つねに家族からみえる所にいたが、「わたしは彼らにはみえないのよ」「わたしは部屋にいるけど彼らはわたしをみてないの」という(159)。

雇主の女性(ノーマ)は彼女に、贈り物の購入やその包装、誕生日やクリスマスのカードへのサインを頼み、贈り物のタグは彼女が書く。彼女は、子供の学校のベークセール[学校が資金集めに手作り菓子などを販売するバザー—鈴木]、サッカー試合での応援、医師の予約、子供のピアノやテコンドーのレッスンへの同行、寄宿学校にいる子供の帰省時の空港出迎えなどで雇主の替わりをしたが、家族や他人からみられていなかった(159-160)。

あるヘルパーは、自分が雇主のために珍しいワインをみつけても雇主は自分の手柄にするといった。ローズもかつてナニーとして自分隠しに協力した。雇主が、彼女がすばらしいのは「まるで君が見えないようだからだ」

10) これは感情労働とその結果と似た関係にある。うまく遂行された感情労働の結果は労働の成果ではなく、自然で本来の人柄から発したものにみえる。「労働が労働として見えなければ見えないほど」(ホックシールド, 2000:194) 感情労働は成功する。

といったとき、単純にほめられていると思った彼女は「まことにありがとうございます、サー」といったからだ（160-161）。サービス提供者とその役割の抹消も、クライアントが自力で「親密な生活」を営んでいるとみせるためだが、これも「親密な生活」の市場による汚染を隠す偽装である。

[3] さらにサービス提供者は、雇主の役割を代行することによって、雇主の感情的負担と感情労働をひきうけざるをえないことがある。

ローズとその友人は、クライアントは自分たちが何をアウトソースしているかを理解していない、とのべた。友人はクライアントに代わって電話をかけ、出た相手に辛抱強く対応した。ローズは、クライアント（ノーマ）が赤ワインを、試着のために借りていた高価なガウンにこぼしたとき、セールスウーマンに謝った。また彼女はノーマに代わり、帰省した息子を空港でハグして母親の愛を伝え、ベークセールで自分で焼いたクッキーを辛抱強く売った。彼女は自分の感情を抑えてクライアントの良い面を演じた。サービス提供者はクライアントの感情的負担や、クライアントが対人演技のためにおこなう感情労働を代行した。感情的負担や感情労働をサービス提供者に代行させることによって、クライアントは自分の気力を奪い、苛立たせ、動転させる人物から距離をおく権利を買っていた（169-170）。

ウェディングプランナー（クロウイ）も、クライアント（ローラ）の感情的負担と感情労働を代行した。ローラは、結婚式のために必要なある行為は自分でやったが、他の行為はクロウイに任せて、感情的負担や感情労働をも代行させた（43,55）¹¹⁾。

[4] だがクライアントが「親密な生活」を他人に代行させることは、クライアントの側では同時に自分の経験の、とくに感情的経験の、喪失を意

11) 彼女の本のこの箇所（55）では、たんなる感情的負担も感情労働にふくまれるかのように、感情労働という用語が不正確に使われている。感情労働とは、他人をある精神状態をもたらすように演技するための感情的努力である。たとえば遅滞なく結婚式を進行させることは心労をとまなうので感情的負担となるが、演技はふくまないで感情労働ではない。だがプランナーが発案したウェディングカードのテーブルへのセットを、自分たちの発案であるかのようにカップルに感じさせる感情的努力（55）は、演技をふくむので感情労働をなす。

味する。ホックシールドはいう。

有料サービスの購買によって、忙しい企業幹部は忍耐の必要から切り離される。世帯管理者の雇主（ノーマ）は、クリスマスプレゼントのラベル作成から切り離される。わたしたちは、これらの経験と経験の諸段階にたいする評価から切り離される。経験と結びついた感情的な達成の喜び、他人とつながる喜び、達成過程における自分自身への信頼さえ失う。サービスの購買では達成感を結果に限定してしまう（224）、と。有料サービスの購買は、経験過程を「結果」にだけ縮減して、願望や欲求のありかたを変更する。「市場はわたしたちが望むもの以上に、わたしたちが望む仕方を変える」（224）。こうして有料サービスの利用は「親密な生活」の経験を変質させるのである。

3. 親密な関係と市場関係との相互制約

[1] 親密な関係が有料サービスで代替されることは、ときに軋轢や緊張をうみだす。ホックシールドは、介護人とクライアントの関係からこの点を論じる。

45歳のある女性（ジョアン）は、70人の職員を抱える地方銀行の管理者で、夫も大病院の呼吸器医長だった。2人とも多忙で、2人の子供がいた。子供たちの世話のために、ネパール人女性ケア労働者（ノーラン）を雇用する。その後、妻を20年前になくし1人だったジョアンの父親が卒中で倒れ、やがて認知症を発症した。治療は不可能だった（173-176）。

ジョアンは父親のアパートにノーランに来てもらい、2人のあいだに愛情ある絆ができた。ノーランは父親の髪を切り、入浴させ、服を着せる。ジョアンは、父親のケアを楽しむノーランを自分の代わりだと思った（173,176-177）。

[2] ホックシールドは、有料サービスの関係が本当の親密な関係に転ずることは「複雑で、おそらく稀だった」（181）という。有料サービスからの真の友情の成立は、一般的ではない。50人の介護人、ナニー、オペア、

そして彼女らの女性雇主の研究では、5人のうち1人しか真のパートナーシップを形成しておらず、ホックシールドがインタビューした介護人と雇主で真の関係を確立できたのは、上例のほかには1件だけだった(180)。

ホックシールドは、有料の介護士を「家族の一員」とみなすのは諸刃の剣だという。それは、ふつうよりも大きな恩恵(食事・休日・誕生日、の共有)も、小さな恩恵(過少手当、過重労働、生活環境の無視)も意味しうる、と(178)。ノーランはときおりネパール料理を持参し、ジョアンはノーランに食材や孫娘の玩具をあたえ、運転免許取得や娘のカレッジ入学や家族の移民書類作成やビザ取得でノーランを助けた(179)。彼女らは大きな恩恵の関係だった。

問題は後者の小さな恩恵のばあいであり、クライアントが介護士を「家族の一員」とみなすのとひきかえに、賃金や労働条件の引下げを提案するばあいである。このばあいは、共同体的な親密な関係が市場関係を制約する。あるいはクライアントが、介護士の賃金や労働条件の引下げを意図して介護士にたいし親密な関係をせまるとすれば、親密な関係は市場関係を隠しており、親密な関係による賃金や労働条件の引下げを予想するサービス提供者が親密な関係に入るのを避けるならば、市場関係が親密な関係を制約する。こうして親密な関係による市場関係の制約も、市場関係による親密な関係の制約も、生じうるであろう。

ホックシールドはこのような制約を展開していないが、雇用契約書の作成をめぐる緊張にはふれている。ジョアンとノーランは賃金、労働時間、病気休暇、休日、健康保険を明記した契約書を作成した。契約は、彼女らの関係に水を差すというよりは、関係の公正性を明確にした。しかし一般的には、雇う介護士を「家族の一員」とみなす雇主は契約書を形式ばった「非家族的」なものと考え雇用条件の明確化を避けるので¹²⁾、親密な関係が

12) 多くの介護士は契約書を望んだが、雇主は個人的絆を冷たい法的絆にするのを嫌って契約書を避けた。あるナニーの辛い経験がある。彼女の給与はまずまずだったが、勤務時間が長かった。ナニーが雇主に契約書の作成を提案したとき、雇主は彼女を解雇した(178-179)。

市場関係を制約する。この点でも、彼女たちの関係は「めずらしかった」(178)。

[3] それでもホックシールドは、友好的取引の下にあった「逆説」を指摘する。ノーランが、ドルを数えず時計をみず契約にこだわらず、心から奉仕をすればするほど、彼女がジョアンの家族と一緒に過ごす時間はますます仕事のようにみえなくなり、また彼女がジョアンの家族にとって不可欠となればなるほど、彼女の「市場価値」は高くなった、と(179)。

ここでは2人の関係に存在した「逆説」が指摘されるにとどまっている。だがこの逆説は、彼女たちの関係を緊張に転じうる。(1)ノーランが雇用契約にこだわらずに心から奉仕をすればするほど、ジョアンの家族と過ごす時間が仕事のようにみえなくなったとすれば彼女の奉仕は労働ではないので、ジョアンは彼女の賃金や労働条件の切下げを提案できる。また(2)ノーランがジョアンの家族にとって不可欠となればなるほど彼女の「市場価値」が高くなったとすれば、ノーランは賃金や労働条件の引上げをジョアンに提案できる。

市場関係と親密な関係の交錯は、このばあいにもクライアントとサービス提供者とのあいだに緊張をうみだす。上の(1)(2)のいずれでも、親密な関係が市場関係を制限する。しかし当事者の一方が親密な関係が市場関係を制限するのを予想して、親密な関係に入るのを避けることもある。(1)のばあい、ノーランが、ジョアンによる賃金や労働条件の切下げの提案を予想できるなら、彼女はジョアンの家族と親密な関係を形成するのを避けることができる。(2)のばあい、ノーランがジョアンの家族にとって不可欠となって彼女の「市場価値」が高くなり、ジョアンに賃金や労働条件の引上げを提案するのを予想できるなら、ジョアンはノーランとの親密な関係の形成を避けてビジネスライクの関係にとどまればよい。いずれのばあいも、市場関係が親密な関係を制限することになろう。

ここでも先におけると同じく、有料サービスでは親密な関係が市場関係を制限し、市場関係が親密な関係を制限する、という事態が生じうるので

ある。

4. 感情統制

[1] 「親密な生活」の歪曲は、サービス提供者が賃労働者として服する労働統制からも生じる。労働者の行動統制とともに感情統制がきわだつ典型例は、代理母サービスである。

インドの不妊治療クリニックによる、代理母の行動統制と感情統制の仕方をみよう。クリニック経営者が手を焼くのは、代理母が出産した赤ん坊と強い絆を形成して、赤ん坊をクライアントに引き渡すのをこぼむ事態であろう。出産後の代理母とクライアントとの接触も、代理母と赤ん坊の絆を維持するので避けなければならない。経営者は、代理母と赤ん坊やクライアントとの接触を、物理的にも感情的にも阻止しようとした。

[2] 医師たちは（経営者も）、代理母から出産を疎外し、商取引の精神に従って代理母と赤ん坊との感情的絆を断ち切ろうとした。第1に、クリニックのパテル医師は、代理母の体内の卵子が彼女のものではないとして、代理母に、自分の子宮を出産装置 carriers, 袋 bags, スーツケース、自分にとって外的なものと考えるように仕向けた。代理母たちは「余分の胎児」を中絶するかしないかの、また帝王切開するかしないかの、発言権がなかった。表向きは「感染を減らす」ためだったが、おそらくは母親を落ち着かせ出産記憶を弱めるために、事実上あらゆる出産が帝王切開だった。さらに、代理母は赤ん坊と会ったり、さようならをいう法的権利もなかった(99)。中絶や出産方法にかんする行動統制も過酷だったが、以上のかたちで代理母たちの赤ん坊への愛情を断ち切る感情統制もおこなわれた。

第2に、遺伝子上の親と代理母との連絡が禁止された。ある女性医師は代理母に長期間連絡をとるのはよくないといい、代理母の携帯電話から遺伝子上の親の電話番号を消去させた。あるクリニックではほとんどの代理母がクライアントと連絡を望んだが、連絡はとれなかった(97)。代理母の感情統制はクリニックの方針だったのであろう。

第3に、あるクリニックでは、出産後に代理母が赤ん坊への愛情を強めるのを避けるために、赤ん坊に母乳をあたえさせなかった。ある代理母は「赤ん坊が泣くとき、わたしも泣きはじめたくなる。わたしが寄り添えないのはつらい」(97) といった。

[3] こうした感情統制のほかに、代理母出産はさまざまな感情的問題をひきおこした。第1に、代理母に非情なクライアントの行動から生じた問題があった。帝王切開出産のあと目覚めて赤ん坊がいないことに気づいた代理母は、2年たってもショックから立ち直れなかった。「彼らは赤ん坊を取りあげて、走って行っただけだった。ありがたいも、さようならもいわなかった」(97)。クライアントの行動は赤ん坊への代理母の感情を断ち切るためだったのかもしれない。そうであればこれは代理母の感情統制の問題でもある。

第2に、クライアントの宗教や性的指向から生じる感情的問題がある。ヒンドゥー教徒のインド人代理母は、出産後カナダ人クライアントがやってきて彼らがムスリムなのを知った。異教徒の子を身ごもる「ばち当たりなこと」をした彼女は、「生涯ずっとわたしはこの罪を背負って生きなきゃならない」ことを悔やんだ(97)。性的指向による感情的問題もある。ある代理母はゲイの子供の妊娠を拒否したといったが、彼女の医師は、クライアントがゲイなら代理母には話さないといった(98)。ゲイの子供の妊娠を拒否する代理母に、クライアントがゲイであることを隠して妊娠させる医師の行為も人道上問題をはらむ。

第3に、出産上の決定権の放棄から生じる感情的問題もあった。代理母たちは多くの卵子を移植されたが、中絶の決定権をクリニックに譲渡していたので、3個以上が生き残るばあいパテル医師は「余分のもの」を中絶した。代理母が3つ子を妊娠したとき医師は1人をあきらめるよう主張した。代理母はクライアントが2人を、自分が1人をひきうけるといったが、パテル医師は1人を中絶した(98)。

[4] ホックシールドは代理母を、マルクスの疎外された人間と同じく「ハ

イパー商品化の犠牲」のようだといいた。妊娠にかんする発言権の制限は、彼女らの自律性、自我、赤ん坊に関係する能力、を低下させた。赤ん坊から離されれば離されるほど自分を容器のように感じ、贈与の精神を維持できなくなった。帝王切開出産から目覚めて赤ん坊の不在に気づいた代理母は贈与の精神を失った。クライアントは赤ん坊を奪ったのだ（98-99）。

だがホックシールドは、代理母も医師も、通常の出産と代理母出産とのちがいを代理母出産それ自体ではなく、代理母出産の大規模な商業的組織性にもとめていたと主張する。そしてこのちがいを、労働者が自分の仕事場、道具、技能で生産した初期資本主義と、労働者が組立ラインで労働し管理者がモニターする後期資本主義とのちがいにたとえる。不妊治療クリニックは営利的「工場」であり、パテル院長は代理母出産のヘンリー・フォードとなるのを切望していた。彼女は、世界中に代理母出産クリニックがあるが、どれも自分たちの「出産実績の—鈴木」数字におよばない、といていたからだ（99-100）。フォード化された代理母出産は、代理母にたいする物理的および感情的な統制によって、親密な関係を寸断する。

第4節 市場化への適応と抵抗

本節では、「親密な生活」の市場化にたいする人びとの適応と抵抗の形態を考察する。

1. 市場による脱人格化の、再人格化による市場からの防衛と適応

[1] ホックシールドはいう。わたしたちは他人との絆の、市場による脱人格化に直面して、この絆を再人格化して市場を市場のように感じなくさせるために、行動する。たとえばベビーシッターと友だちになり、ラムローストの調理で嘘をつく、と（224）。

雇ったベビーシッターと友だちになることは、市場の非人格的關係を再人格化するであろう。出来あいのローストラムを買ってきてそれを自分で

調理したものだど他人に偽ることは、自分の親密な生活が市場の非人格的關係に汚染されている事実を隠し、人格的關係の健全さを維持していると他人に装うことによって、自分を守る。

しかしここで重要なことは、市場の非人格的關係を人格的關係に偽装して、市場化された生活を自然にみせるように努力することによって、すなわち、われわれ自身の内面的世界が市場によって何も損傷されていないことを示すことによって、親密な内面的世界を守ろうとするこの行為それ自体が、市場の世界への適応となってしまう点である。

[2]ホックシールドはのべる。「アメリカ人は変化への適応においてみごとである。きわめて急速に変化する世界ではそれは役立つスキルである。しかしそれに付着する隠れた危険がある。というのは、…わたしたちはみな内側から市場を「規制」しようとして、忙しく適応しているからである」(225)と。

危険とはつぎのことを意味する。市場の非人格的關係を糊塗して人格的關係へと偽装することは、市場的關係がわれわれの「親密な生活」を汚染したり浸食していないことを示そうとする、われわれの内側からの市場の「規制」行動である。だが規制行動をとることが同時に、われわれが市場的生活を自然化し、市場的生活に適応するという帰結をもつことである。

以下では、人びとによる市場化への抵抗の5つの形態を論じるが、まずは市場を規制しようとする行動の、この逆説的帰結を指摘しておかなければならない。

2. アウトソースしてよいものと、すべきでないものとの区別

[1] 第1に、人びとはせまりくる市場の世界から本来的なもの、「村的なもの」を守ろうとするが、その行動はまず、クライアントによる両者のあいだの線引きとしておこなわれる。ホックシールドはいう。わたしは人びとが「あまりに村的」に思えることと、「あまりに市場的」に思えることとを区別しているのを知った。人びとは、購入されるものから個人的なもの

を、市場的なものから村的なものを、守ろうとしていた、と (12-13)。

彼女は、先に紹介した有料サービスの利用に分業における比較優位の論理を適用していた女性 (エープリル, 本稿, 407頁参照) に、いろいろの有料サービスをみせて、それぞれのサービスについてどう思うかをたずねた。不得意な家事労働は全部アウトソースしてよいと考えていたこの女性でさえ、子育て全般にこれを適用することはせず、線引きをしていた (110)。

彼女の反応はサービスによってちがっていた。名前は子供のパーソナリティを「設計する」と考えるネイモロジストや、パーティで楽しさを盛り上げる「盛り上げ屋 animator」には不賛成だった (108-109,111)。ベビープランナーについては、条件付きの賛成で (109), おまるしつけ業者や指しゃぶり治しの専門家には、はまりこめば依頼するし友人にも勧める、と賛成した。彼女は子育てサービスごとに賛成, 不賛成の線引きをした (111-112)。

[2] 先に言及した、娘のためにバースデープランナーを頼らずに自分でバースデーパーティを企画した男 (マイケル, 本稿, 406頁参照) もじつは、どの活動はアウトソースしてよくどの活動はそうすべきでないかの区別にもとづいて、それを試みたのである。

マイケルと妻は2人とも未公開株投資ファンド [基金を集めて企業を買収し、収益力を向上させ、その後企業を転売し売却益を出資者に配当するファンド—鈴木] のマネージャーで、3人の娘がいた。妻はフルタイムで働き、自分もかなりの期間自宅を留守にする。だから家族一緒に過ごす時間を確保するために、夫妻は、週1度の家内掃除人、フルタイムのナニー、犬の散歩代行者を雇っている。自分たちのキャリア生活のために必要だったので、夫婦は手伝いを雇うことを疾しくは感じなかった (120-121)。

しかしマイケルは日頃から、親密で個人的なタスクのアウトソースには疑問をもっていた。休日に自分で犬を散歩させられないなら、なぜ (散歩代行者を雇ってまで) 犬を飼うのか。バースデーパーティも同じで、見知らぬ人を雇うくらいならなぜパーティを開くのか。それは度を越しており、

子供たちは自分たちでは楽しさをうみだせないと思ってしまう。バースデーパーティを企画するのは、父親の役割だと思った（120, 122-123）。だから「ぼくが全部やる」と決心した。結果は先にのべたように、みごとな失敗に終わった。

マイケルも有料サービスの利用すべてに反対したわけではなく、それらのうち買ってもよいものと買うべきでないものを区別した。そしてただ、自分が父親の役割だと感じた有料サービスだけを、市場から取り戻そうとしたのである（123）。

3. 有料サービスのなかでの主体性の発揮

[1] 第2の市場への抵抗は、サービスをうけるなかでクライアントが試みる主体性の発揮である。ある出会い系サイトの男性恋愛コーチ(エバン)は、女性クライアント(グレース)に、送られてくるすべてのレスポンスを読むように勧め、有望なものを選ぶのを助けるといった。彼女は、それは「やりすぎ」と感じた。「わたしが、誰が有望で誰がそうでないかを判断できる唯一の人間なのよ」「わたしは自分であなたを選んだ、とパートナーにいえるようになりたいの」と。理屈はこうだ。「もしあるコーチが男にラインでメッセージを送り別のコーチが女にそうするなら、それはあるコーチが別のコーチに求愛してることにならない?」「2人のシラノ」は多すぎた(23)。この理屈の下では、コーチに全面的に従うのではなく自分で主体的にデート相手を選ぶという意識が働いていた。

事実、彼女は恋愛コーチの助けなしで「自分でレスポンスを選び取らなければならないと感じた」(27)。メッセージをよく読めば、「誰が純粋に恋愛を探しているか、そして誰がからかいの対象を得ようとしているか」がわかったので、火遊びや短期結婚の連続を望む男を切り捨てた。欲しかったのは、成長していく人、道徳的に正直な人、セックスアピールをもつ人、わたしに夢中になる人、積極的で、感情的・精神的に成熟した人、だった(27)。女性はプロの恋愛コーチを雇用したが、いろいろのキーポイントで

自分で決めると主張することで、自分が市場に乗っ取られるという不安を打ち消した。ある程度までプロの指導に従ったが、自分が責任を負う空間は確保した。「わたしはこれをおこなうためにあなたに支払います。わたしはあれは自分でおこないたい」(40)と。

[2] 他の人びとも、失われていく家族や自分の役割を取り戻したいと考えて、有料サービスを拒絶したり、それをうけとった後に生じた結果を反省して事後的に結果を訂正した。ある女性は、居間を設計しなおすために男性室内装飾家を雇ったが、彼の提案は彼女の考えとちがったので、彼に支払いはしたが残りは自分でやった、といった(128)。

ある多忙な男性重役は、補佐員に、自分の母親の誕生日の花を贈らせたが、花がどんな花か知らず恥をかいたので、次は自分でやると決めた(128)。別の逸話もある。ある女性教授は、同僚の妻が出産したので、パソコンで「トイザラス」[玩具のチェーン店—鈴木]のオンラインストアから中位の値段の贈り物を選んで、ビザカードで支払った。だが自分では、赤ん坊もみず、贈り物も渡さず、添付のカードも書かず、祝いの電話さえしていなかった。1ヶ月後には、贈り物が何だったか思い出せず値段しか覚えていなかった。そこで彼女は、小さなプラスチックのメジャースプーンを買って、同僚の家族を訪問した(129)。

[3] 以上のサービス提供のなかでの主体性の発揮や自分の行動の事後的訂正について、ホックシールドは総括する。有料サービスはガイドし、手助けし、時間を節約するために存在したが、「いずれのばあいにも、クライアントは個人的行為をアウトソースし、つぎに行為のある側面を自分の個人的表現として回復しようとした」と。女性教授にはオンラインでの贈り物が、「ビザカードから赤ん坊への」自動的な贈り物に思えた。事を早く片付けるために贈り物にかかわる感情経験を省いてしまったことが、彼女に疾しく感じさせた。娘のバースデーパーティを自力で試みた男と同じく、彼女は、真性の行為の感覚を取り戻すために、市場に抵抗しなければならなかったと感じたのである(129)。

娘のバースデーパーティを独力で企画した男は、自分が失敗したと思った。だがそうではなかったとホックシールドはいう。妻はのべた。自分は夫の行為が最初は恥ずかしかったが、つぎにはとても楽しく思えた、と。そしていま8歳の娘は、ホックシールドにいった。全力を出した父さんは父さんらしかった、あんな父さんがいて自分はとても運がいい、と (129-130)。商業サービスに抵抗を試みた男の行為は、少なくとも半分は成功したのだ。

人びとは市場サービスのうち受け入れてもよいと思うものを主体的に選びとり、受け入れていたものを主体的に拒絶したり事後訂正することで、市場から身を守ろうとする。

4. 感情的自己防衛

[1] 第3に、サービス提供者は、金銭的サービスを新たに意味づけたり、異なって解釈することによって感情的自己防衛をはかる。代理母の試みからみよう。

ホックシールドがインタビューした「アカンクシャ・クリニック」の代理母たちのあいだでは、代理母サービスに「実際のすぎる」人びとが非難された。代理母サービスで大金を稼ぎ、自宅を新築し娘たちを私立学校にやった代理母は、実利的で欲張りすぎると、他の代理母から手厳しく非難された。代理母たちはみな金が必要であり、金を稼ぐために子宮を賃貸していた。彼女らは代理母出産を利他的行為とは思わなかったが、「実利主義が自分たちの母性の感情を抑制しているという考えには強く抵抗した」(94-95)。ある者は、産んだ赤ん坊を一生覚えているといった。金銭的利得しか考えない先の代理母は金のためにだけ赤ん坊を身ごもる、だから「売春婦と同じ」だと非難された。「金が欲しくてたまらない代理母でさえ強烈に誇りをもっていたのは、金に執着しすぎるようにならないことであり、自分たちが人生の贈り物をあたえているのだと感ずることだった」(95)。

代理母になるのは金のためだけではなく、人生の贈り物をあたえるためでもあると考えて、矜持を保とうとした。こうして市場の論理から自己の

自律性を感情的に防衛した¹³⁾。

[2] さらに、代理母は感情労働の重い代価を支払うことで自己防衛をはかった。お腹の赤ん坊に、要求されるほど超然とした態度をとることは自然ではなかった。彼女たちは無関心を装う努力をした。ある代理母は、赤ん坊を自分のものと考えない、といった(100)。

他の者たちは、種々の正当化理由で無関心を強めようとした。ある者は、自分の知らない子供なら最後は自分を見捨てるから、そういう子供には無関心になれる、といった。すでに娘たちをもつ者は、娘のほうが息子より忠実で助けになると話し、自分はこれ以上子供を欲しくないし、息子も欲しくないので、赤ん坊を手放せるといった(100)。

5. 市場の関係における非市場的なものの選択

[1] 第4は、市場の関係にいる人びとも非市場的关系を選択する事実だ。ホックシールドはいう。ほとんどすべての人が、「有料サービスをノウハウの源泉や時間不足を償う方法」とみなしたが、「誰も、村に代わる全体的代替としての市場」には不賛成だった(184)、と。

彼女がインタビューした全員がインターネットの出会い系サイトを、パーティやオフィスでの自然の出会いがうまくいかなかったばあいの代替物と位置づけていた。だが2005年の調査では、国内インターネットの成人利用者(1600万人)の11%がオンラインデートのサイトを訪れている。出会い系サイトはこのように盛況だが(35-36)、2つの否定的事例がある。

[2] 第1の事例は、出会い系サイトの恋愛でも、非市場的关系が市場的关系にまさることがあることだ。ある女性クライアント(グレース)は、市場の仕方ではなく非市場的仕方で接近してきた男性を恋愛相手として選ぶ。自分のプロフィール公開の数ヶ月後、彼女は2度の結婚歴がある、ミ

13) 代理母のこの対応を、アメリカ人クライアントはもちろん、まったく理解しなかった。先にのべたように彼/女らは、代理母は金が必要なことから、自分たちの出産依頼は彼女の経済的援助となり相互的利益となる、と単純に考えた(83)。

ュージションで教師でもある、ハゲでタトゥーをしたマーセルと会った。彼は、望む男性（背が高く、見栄えが良い、会計士かエンジニア）ではなかった。しかし彼は友人や家族に彼女を紹介してくれ、彼/女らも彼女を受け入れてくれた（29-30）。

男性は、非市場的仕方で自分の生活に彼女を挿入した。彼は、ネットの写真の彼女の目とスマイルの愛らしさに純粹に惹かれ、彼女を外見と同じく内面もやさしく面倒見のいい人だと思った。彼は1から10点までの査定も、自己のブランド化 [自分の独自の価値を表現し、伝え、受け入れさせること—鈴木] も、ROI（投資収益）も知らなかった。女性は恋愛市場に参入したが市場がかかわったのはここまでで、「その他の部分で必要とされたのは贈与の精神^{ギフト}だった」（30-31）。こうして非市場的關係が市場的關係にまさった。

[3] 第2の事例は、女性クライアント（グレース）の男性恋愛コーチ（エバン）の指導方法と考え方である。彼は、彼女を一方では市場的仕方で恋愛指導したが、他方では隠れたパラドックスを中心に指導した。すなわち商業的すぎる仕方で恋愛を買い求めるなら恋愛はみつけれない、というパラドックスである。そればかりではない。彼自身は、出会い系サイトで本当の愛をみつけようと思っておらず、友人のパーティでフィアンセとなる人と（生身のかたちで）出会い、ふつうの仕方でプロポーズするだろう、と告白した（40）。

実際に彼がみつけた女性も、望んだ女性とはかけ離れていた。望んだ女性は自分よりすこし若く、結婚歴のない、ユダヤ人の、アイビーリーグ卒の女性だった。みつけた女性はカトリックで、離婚歴があり、年長で、コミュニティカレッジ卒だった。にもかかわらず彼は自分があるがまま愛してくれる、親切で思いやりのある人を見つけたといった（41）。女性クライアントに、交際を望む男性の特徴を書き出させていた恋愛コーチが、である。ここでも非市場的關係が市場的關係にまさったが、これは恋愛コーチ自身が、職務上の自分の役割を真実には適切とは思っていないことを意味

するであろう。彼は、出会い系サイトでの恋愛は「本当の」恋愛ではなく「偽りの」恋愛として評価していたかにみえる。

以上では、有料サービスを頼る人びとのなかにも、非市場的な「親密な生活」をもとめている者がいることが示された。市場的關係による「親密な生活」の、もっとも極端な代替をなすかにみえる代理母出産にも、この事実を追認する印象的逸話がある。ホックシールドがある女性体外受精技術者にある質問をしたとき、彼女は質問に答えたのちにこういったという。「結局、母親は母親なんです、そうじゃないですか。分娩室には、代理母、医師、看護師、看護助手、そしてしばしば遺伝子上の母親がいます。ときにはわたしたち全員が泣きます」と（103）。代理母やクライアント、また代理母出産にかかわる医師や看護師にとってさえ、親密な生活を引き裂く商業論理は、無感情を装ってやりすごすには過酷すぎるのである。

6. 市場的なものへの対抗戦略

[1] 第5に、人びとは市場にたいし対抗戦略をとることがある。ホックシールドは、市場の影響から自分たちを守るために人びとがとる行動をあげる。(1) アウトソースされない生活を象徴する物や場所を分離したり、有料サービスが押しつけた親密な生活を再度要求する（自分たちで誕生日の風船をふくらませる）。(2) きまり悪さや傷つく感情を避けるために裏ルートで市場とかかわる（ローストラムを手製だと嘘をつく）。(3) 市場から自由な領域をつくり、ある生活領域のアウトソースを埋め合わせる。(4) サービス提供者との感情的絆を作って人間的接触を回復する（ベビーシッターと友人になる）（224-225）。

(1)～(4) には、括弧内であげられる例で自明のものもあるし、すでにふれたものもある。以下では、市場サービスへの対抗戦略としての(3)に焦点をあてる。

[2] (3)は自覚的に非市場的空間をつくりだし、これによってアウトソースした活動とのバランスをとる、という自己防衛行動である。有料サー

ビスの購入に積極的に賛成していた有能な女性税理士（エープリル）も、アウトソースする活動と、自分の生活を自分でつくり出していることを再確認できる活動とをバランスさせる必要を感じていた。生活のある部分をアウトソースするなら、別の部分で「基本に戻る」必要がある、と（115）。

その機会は訪れた。家の近所に、9頭の馬のいる農場をもつドンという男がいた。男やもめのドンは彼女の家族の友人となり、ドンは彼女の子供たちに乗馬を教えた。ドンがガンを病んだとき、家族は治療中の彼を訪れる一方で、馬の世話をした。夫は早朝に起きて農場に行き馬に餌と水をやり厩屋を掃除して、職場に行った。子供たちも馬の世話のために、暑い日に水桶から水を汲みだし掃除して、泥だらけになって泥のパイを作る楽しい経験をした。一番下の子がいった、「母さん、今日はぼくの人生で一番いい日だよ」（115-116）。

彼女は多くの活動をアウトソースしていたが、家族の注意を、集団的な努力、犠牲、楽しさを必要とする1つの目標（馬の世話）にひきつけることで、これの埋め合わせとした。このすべてが「村」の要素を家族生活に吹き込んだが、病気のドンの世話は「村」を彼にまで拡大した（116）。ホックシールドはいう、家族と一緒に馬小屋を掃除した彼女は「超アウトソースされた生活への対抗として、「原点に帰る」こと」を試みた、と（180）。

[3] 他の人びとは、プロのサービスに頼る生活を自分たちの手に取り戻すために、手作りのように感じられる瞬間をつくりだそうとした。2人の子どもをもつ働く母親は、「週末の、家にいる、キャンプ旅行」を計画する。家族全員が、金曜日の午後4時から月曜日の朝まで電気なしで、キャンプ用バーナーを用意して、裏庭で寝るのである（116-117）¹⁴⁾。

馬小屋での経験を話した後、先の女性税理士はいった。近頃わたしたち

14) 『タイム・バインド』（2012:87-88,320-321）は、しかしこうした事例に反して、有料サービスの導入で「細切れ」にされる家族の時間に対抗して「家族がともに過ごす濃厚な時間」であるクオリティ・タイムを意識的に設定するが、それも結局、仕事時間の一コマとなってしまふ事例に言及する。

は、専門家から離れる仕方を教えてくれる専門家を必要としている、でも自分はそれをスキップする、自分の手は泥のパイを作ることでめちゃくちゃなもの、と（117-118）。

「親密な生活」を有料サービスで置き換える消費者は、市場化してよいものとよくないものを区別しているばかりでなく、市場化にたいするささやかな抵抗を試みている。

[4] 以上、市場〈対〉共同体の対立にかんするホックシールドの主張を考察してきた。本稿は彼女の主張を3つの論点に整理したが、しかし実際には、(1) 諸事例とそれにたいする彼女のコメントは、彼女の著書の各章におけるサービス提供者とクライアントの具体的かかわりのなかに差し挟まれて散在するだけで、それらについて立ち入った分析がなされているわけではない。しかも、(2) 彼女は、市場〈対〉共同体の対立にかんする、わたくしが3つに整理した諸論点のそれぞれの例証をなす諸事例を、体系的に関連づけて分析しているわけでもない。これでは、諸事例は市場〈対〉共同体の対立を示すたんなる逸話として読み飛ばされてしまう可能性もある。これは彼女の分析上の不備である。この不備が補正されていたとすれば、彼女の著書はもっと大きなインパクトをもちえたと考えられる。

この点はもちろん、市場〈対〉共同体の対立を検証するために彼女が発掘してきた諸事例の重要さに鑑みれば、大きな割引を受ける権利はある。しかしながら、彼女の研究方法と考察にはこの不備のほかに、いくつかの疑問点がある。次節でそれらを検討しよう。

第5節 検討

本節ではホックシールドの考察の3つの問題点を、(1) 資本・賃労働関係の周辺化、(2) 市場的關係と非市場的關係の二分法、(3) 市場化への処方箋の曖昧さ、として検討する。

1. 資本・賃労働関係の周辺化

[1] 彼女があつかう多くのサービス提供者は自営業者であり、賃金労働者ではない。ウェディングプランナー、バースデープランナー、ネイモロジスト、外国人ナニー、世帯管理者、老人ケアマネージャー、介護士、カップルセラピスト、葬儀屋、ウォントロジストがそうである。雇用関係が明示されないので明確に賃金労働者とわかる者はごくわずかで、恋愛コーチ、父親業コーチ、ジムのトレーナーなど賃金労働者と思える者についても、雇用関係の側面には立ち入らずクライアントと直接接触する局面だけが切りとられる。

多くのサービス提供者が自営業者であるため自律的で、クライアントにたいして裁量をもち、彼/女らの個人的な事情や感情に配慮したきめ細かな対応が可能となっている印象をうける。たとえば、死期がせまる夫の希望どおりに安楽死させてやるべきだと、その妻を説得したカップルセラピスト（ソフィー）を、ホックシールドはこう描く。彼女は、夫婦の結婚、その持続、その平穏な終了を助けた。この夫婦と彼女の関係はクライアントとプロの関係だったが、彼女は「村の長老の、そしておそらくは理想的母親さえもの、知恵、忍耐、権威をもたらした」（63）と。自営業者をとりあげたためにサービスの提供関係では非人格的側面が突出せずに、個人的関係を多分に残した穏和な関係になっている。

[2] この点で異なるのは代理母のばあいである。代理母とクライアントのあいだには、代理母仲介業者たるインド人医師（パテル）が介在する。医師は、世界最大の商業的代理母を抱える「アカンクシャ・クリニック」の院長であり、クリニックは品質管理（たとえば代理母の管理された生活）と能率（たとえば代理母とクライアントとのビジネスライクな関係）を誇る。クライアントが直接接触するのも、代理母を選定しクリニックに補充するのも院長で、そのため彼女は代理母から怖れられる（78-80）。

クリニックは人工受精や受精卵移植の専門的医師や技術者、看護師など

を擁するばかりでなく、近隣の代理母寄宿舎をも所有する。クリニックは代理母の出産料を決めたが料金は異なり、アメリカ人夫婦のために1人を身ごもった代理母には5,000ドルが、インド人夫婦のために双子を身ごもった代理母には3,400ドルが支払われた(91)。クリニックはクライアントに請求する代理母出産料をも決め、両者の差額の一部を利益としたであろう。

[3] クリニックは、代理母を出産まで短期雇用して、代理母サービスをクライアントに販売する資本主義的企業であり、院長は企業の経営者＝管理者である。ホックシールドは、代理母たちも医師たちも、通常の妊娠と代理母妊娠とのちがいを、代理母出産の事実それ自体によるとは考えず、出産を大量生産事業にするか否かにもとめていたという。それは、労働者が自分の生産手段と技能をもつ職人であった初期資本主義と営利的組立ライン工場の労働者である後期資本主義とのちがいに似ていた。このゆえにホックシールドはパテル院長を、「代理母出産のヘンリー・フォード」をめざす者とのべたのである(99-100)¹⁵⁾。

だから代理母出産では、管理者(資本家の代理人)－労働者－顧客というサービス提供における3極関係¹⁶⁾が存在する。3極関係のもとでのサービス賃金労働者とクライアントの関係でも、自営業のサービス提供者とクライアントの関係でも、クライアントは貨幣でサービスを買う点では同じ「市場関係」だが、実際には2つの関係はきわめて異なるであろう。

それはインド人院長の代理母にたいする厳しい要求と統制からも容易に推測される。たとえば院長は代理母に、胎児が彼女のものではないことを徹底していきかせ、「余分の胎児」を中絶しない権利をあたえず、出産記憶を低下させるために事実上すべての出産を帝王切開にさせ、新生児に母乳をあたえることを禁じた(99)。代理母にたいする統制の苛烈さは、出産

15) インドでは2002年の合法化後に代理母出産が急速に拡大する。広告はインドが「第三世界の値段、短い待ち時間…で、第一世界の技能を提供」するとのべ、インド政府は「第一世界の患者」をインドに誘う(84)。

16) 3極関係について詳しくは、鈴木(2012:第1章)を参照されたい。

という人間の根幹にかかわる行為のアウトソース化にも関連するが、基本的にはこの行為を利殖の目的にすることに淵源する。それは、出産の目的が大量生産企業の利潤の最大化におかれ、代理母がこの目的に厳格に従属させられるからである。

[4] とうぜん2つの状況のもとでの親密な生活のアウトソース化の様相も異なってくる。自営業的サービス提供者-クライアント型のサービス提供関係では、親密な生活の市場化の影響はサービス提供者とクライアント双方に現われる。ホックシールドが、当事者双方の親密な生活の市場化の影響を考察するのはそのためであり、彼女の本でも世帯管理者（10章のローズ）や老人ケアマネージャー（13章のバーバラ）はサービス提供者としてひどく精神的に傷つけられるが、しかし一般には親密な生活の市場化の影響を強くうけるのはクライアントの側であろう。それは、サービス提供者が営利的なプロでありかつ自営業者なので、自分の「親密な生活」の市場化の程度を調整できる裁量をもつからである。

だが、管理者-労働者-顧客という3極的サービス提供関係では、「親密な生活」の市場化の影響を強くうけるのは、サービスを提供する賃金労働者であろう。というのは、サービス提供者が顧客との関連で「親密な生活」の市場化の影響をうけるのは、自営業的サービス提供者-クライアント型のばあいと同じだが、3極的サービス提供関係では、賃金労働者はサービス提供において管理者による統制関係に入り、この統制関係からも「親密な生活」の市場化の影響を強くうけるからである。代理母出産における代理母にたいする物理的、感情的統制の過酷さはすでにみたとおりであるが、3極的サービス提供関係ではサービス労働者にたいする「自分隠し」や感情的負担・感情労働の代行の要請なども、管理者の側からの直接間接の強制となるので「親密な生活」の市場化の影響を強くうけるのは労働者となろう。

しかしホックシールドは、商業的代理母出産では単純な市場関係と大量生産としての資本主義的市場関係の区別に言及したものの、そしてサービ

ス提供がたとえばオンラインデート産業などでは大規模に組織化され(36,38), 葬祭業ではかつての町の葬儀屋が全国的葬儀チェーンにまで発展している事実に言及するものの(213), 代理母以外の有料サービス提供の調査ではほとんど両者を区別せずに, 大体において自営業的サービス提供関係だけをとりあげ, そこでの取引当事者たちの「親密な生活」の市場化の影響を考察するにとどまっている。これは考察方法上の欠陥であり, 資本・賃労働関係が周辺化されてしまっている。

サービス提供の2つの型のちがいに相応の関心を払い, 資本主義的サービス提供の3極関係に焦点をあてれば, より興味深い結果を期待できたとと思われるだけに惜まれる。

2. 市場的關係と非市場的關係の二分法

[1] 市場化にたいする人びとの防衛行動にかんする議論は, 市場的關係〈対〉非市場的關係という図式を中心に構成される。市場的世界が家族関係やコミュニティ関係に侵入してそれらを変質・分解させていく状況を描くには, この図式はきわめてわかりやすい。

だがこの図式には少なくとも3つの欠陥がある。第1に, 市場的關係〈対〉非市場的關係という把握では, 非市場的關係が, 共同体的な, 本当の, 自律的で, 人間にとって本来的な関係, というように, 本来のあるべき人間関係として把握され, この関係に市場的關係が, 私利にもとづく, 歪められた, 他律的で, 非本来的な人間関係として対置される。一言でいえば, 現在の生活形態は, 市場的關係によって汚染され疎外された非本来的状態であるという, 単純な二分法にもとづく疎外論的把握におちいる危険がある。

むしろ市場的關係は, 歴史的に, 共同体的な非市場的關係のあとから発展してきたものであるから, 共同体的な非市場的關係が市場的關係によって歪められてしまうという因果関係は, 多くのばあいにはあてはまるかもしれない。

だがホックシールドのぼあい、市場的なものはすべて否定的意味しかもたないという、あえていえば皮相な理解が存在していて、この理解に対応して、非市場的なものこそが肯定的で真実の世界（「ただやるだけ」の世界）をなす、という理解が成立しているように思われる。これはいかにも単純な二分法的理解である。この理解では、歴史的に市場的關係に先行する非市場的關係が、現在の社会を支配する市場的關係が押しつけられて縮小されたのちに、取り戻されるべき、回復されるべき肯定的世界とされ、そこには人間生活にとって否定面は存在しなかったかのごとく理解される。その反面、市場的世界の關係はすべて否定面しかもたず肯定面は何もない、と理解されることにもなる。

すなわち、(市場的なもの)〈対〉(共同体的なもの、あるいは「ただやるだけ」の世界)、という二分法で現代市場社会を理解して、一方の市場的世界に否定的評価しかあたえないのであれば、「親密な生活」をアウトソース化する社会に代替すべき将来社会は、共同体的關係を復活させた社会でしかありえなくなる。

だがこうした理解はどうぜんながら問題がある。非市場的關係のなかにも現代のわれわれからみて否定的意味しかもたない關係も存在するからだ。たとえば、「ただやるだけ」の世界が、暗黙の集团的規範にもとづく集团的な行動強制をとまうとすれば、それは個人の自由を抑圧するといった否定的意味あいをもちうる。あるいは、すでにのべた（本稿、419頁参照）、市場サービスは提供者の「選択」で打ち切ることができる点に制限性があるが、「親密な關係」は打ち切る選択ができない「義務」である点に絶対性ないし優位性があるとみるホックシールドの見方は、伝統的価値観に立脚する硬直の見方だという批判も可能である。「親密な關係」であっても少なくとも一方の当事者には苦痛の關係でしかないならば、絶対性や優位性をもつと思われる關係を絶ち切る点こそ主体的個人の自由があるのであり¹⁷⁾、この判断のうえに市場サービスのほうが親密な關係より望ましいとみなす立場もありうるからだ。いずれにせよこれは、抽象的レベルで議論

の正否が問える問題ではない。

また逆に、市場関係の発展するなかで、ばあいによっては可能性としてであれ、展開されみえてくる肯定的関係も存在するはずである。市場的關係が否定したものを、すべて回復すべき「ただやるだけ」の肯定的世界に属すると決めつけるわけにはいかないのと同じく、市場的關係をすべて否定すべきものと決めつけるわけにもいかないであろう。だとすれば、市場的關係のなかの肯定的関係を、主体的にあるいは積極的に取り込むことをつうじて共同体的なものの再建をはかる可能性がないともいえないはずだ。このような理解に立って、市場的關係が動揺させている家族関係にたいして、肯定面と否定面双方の様相をもう少しきめ細かく観察し、検討する必要があるのではないか。

[2] 第2は、市場的關係に対置される非市場的關係を、ホックシールドはしばしば一括りにして、「村的なもの」「ただやるだけ」の世界として提示している点である。しかしすぐにわかるように、彼女は他方で、わたしたちが必要としているのは、「公的生活とコミュニティへのもっと大きなコミットメント」(13) だといってもいる。つまり「非市場的關係」は、「村的」関係や「ただやるだけの世界」だけでなく、さまざまなレベルの政府や公的機関などの公的關係や、おそらくはボランティア活動¹⁸⁾などもふくむと思われる。

ところがホックシールドは、「非市場的關係」を「ただやるだけ」の「村的」生活や共同体的関係に押し込めてしまっているばあいが、あまりに多い。これでは「非市場的關係」から諸政府や公的機関などの存在が閉め出されている、という誤解を招く。しかも「非市場的關係」に諸政府・公的機関・ボランティア活動などをふくめるとしても、あるべきそれらの相互

17) 典型例が離婚だ。離婚によって「われわれは、屈辱的な関係、孤独な関係、争いの絶えない関係、愛のない関係を断ち切ることができる」。離婚は妻を「暴力をふるう夫」から、子供たちを「利己的な親」から解放する（ウォラースタイン／ブレイクスリー、1997:47）。

18) ボランティア活動については、注23)をみよ。

関係が明確に提示されていない。より踏み込んだ説明をあたえるべきであろう。

[3] 第3は、市場的关系と非市場的关系は、ホックシールドのように、これは市場的关系、あれは非市場的关系というように截然と分けられないばあいも多い、と思われる点だ。

ホックシールドがあげる単純な事例であればこの区分は可能かもしれない。たとえばクライアントは、「親密な生活」の市場化にたいして、ここまでは可であるがここから先は不可、という線引きをしているという事実が、かなりのサービスについて指摘されていた。また、プロのアドバイスを、クライアントは自分にとって適切かどうかを主体的に判断して、従えるものと従えないものを峻別する、という行為が市場的行为か非市場的行为かの線引きの例としてあげられていた。あるいは、市場的行为の合間、合間に市場に浸透されていない行為や世界を立ち上げてバランスをとる、などの諸行為にも言及されていた。家族の注意を、集団的努力や犠牲が必要な馬の世話という目標に集中することによって、あるいは、家族が週末から週初にかけて電気なしで生活する「週末の、家にいる、キャンプ旅行」を計画することによって、市場に頼る日常生活とのバランスをとる行為である。

こうした単純な例であれば、市場的なものと非市場的なものの区別は可能かもしれない。しかし現実には、市場的なものが非市場的なものをつうじて発現してきたり、逆に非市場的なものが市場的なものをつうじて発現くるばあいも多いのではないか。

先に言及した、認知症を発症した父親のケアをするネパール人女性介護士（ノーラン）を雇ったキャリアウーマン（ジョアン）の例（本稿、422-424頁参照）を、少し異なる観点からみてみよう。女性介護士が、キャリアウーマンの父親に好意をもち、心のこもるケアをしたので、2人の関係は金銭的关系をこえた親密なものとなった。だがホックシールドは「この友好的取引の下には、ある逆説があった」という。すなわち介護士が金銭的关系を顧みず心から奉仕すればするほど、彼女の介護はますます仕事には

みえなくなり、彼女がジョアンの家族にとって不可欠となればなるほど、彼女の「市場価値」は高くなった、と（179）。

この例では、介護士が親身になって父親のケアをすればするほど、それは労働とはみえなくなった。つまり、市場的關係をきっかけに始まった仕事¹⁹が周到になされればなされるほど、それは非市場的關係として現われてきた。反対に、介護士が家族にとって不可欠となればなるほど、彼女の「市場価値」が上がった。つまり、介護士と家族との非市場的關係が深まれば深まるほど、市場的關係で表現される彼女の評価は上がったのである。

現実の世界では、市場的關係と非市場的關係は截然とは分けられず、むしろ前者が後者をつうじて表現され、後者が前者をつうじて表現される、といった相互的交替關係として現われるばあいも多いのではないか。彼女に追究してもらいたかった点の1つである。

3. 市場化への処方箋の曖昧さ

[1] ホックシールドは『アウトソースされる自己』の「序論」ですでに、市場に全面的に依拠する生活を拒絶する姿勢を鮮明に打ちだしている。すなわち「本書の1つのメッセージは、市場が提出するジレンマにたいする回答は、私的なアウトソーシングへの普遍的なアクセスのうちにはみいだされないのであろう、ということである。本当の回答は、公的生活とコミュニティへのもっと大きなコミットメントのうちにある」（13）、と。

彼女の主張は、市場が提出するジレンマの解決は「親密な生活」の全面的アウトソース化にはもとめられず、真の解決は公的生活とコミュニティの拡大にある、ということである。市場とそれに依拠した生活の否定面を彼女が強調するのは前項でみたとおりである。彼女は家族の解体を是認する側には与しないと思われるので¹⁹⁾、動揺する現代の家族を救う処方箋は、

19) たとえば彼女は、時短運動についていう。「家族に感情を投入せず、家族から自由になろうとする時代の風潮のなかで、家族生活にどれだけ「心情的に投資する」必要性があるかを訴える」ことが重要だ、と（ホックシールド,2012:373）。

市場の拡大と公的生活・コミュニティの縮小というアンバランスに対置すべき、市場の拡大の抑制と、公的生活とコミュニティの拡大とによるその是正となろう²⁰⁾。

[2] ここには2つの問題がある。第1は、市場の拡大の抑制と公的生活とコミュニティの拡大をどのようにマクロ的に構想するかという点であり、第2は、市場的なものと非市場的なものとのミクロ的なバランスのとり方である。第1点からみよう。

ホックシールドは、家庭生活への市場の侵入が強化されたのは、1970年代以来の新自由主義と1990年代以降のグローバル化の進展によると主張する。グローバル化のもとで激しい競争に直面した企業は、新自由主義的労務管理によって労働世界に長時間労働と労働強化をせまり、企業のリストラとダウンサイジング、また不安定就業者の増加をつうじて、雇用を動揺させて、それを基礎とする家庭生活をも不安定化させた²¹⁾。他方では、財政支出の削減が家族を支える公的サービスを縮小した。双方からの挟撃に女性就労と離婚の増大がつけ加わって、中流階級の共働き家族は老親や子供のケアの担い手を失い有料サービスにむかったというのが²²⁾、家族の危機にたいする彼女の基本認識である。

だが危機にある家族を、先にみた市場の拡大の抑制と公的生活とコミュニティの拡大をつうじていかに補強するのか、具体策が提示されていない。ここではそもそも、市場サービスを購入できない労働者階級の共働き家庭

20) アンバランス是正の必要はくり返される。「わたしたちがおこなっていないことは、…市場、国家、市民生活のあいだの基本的アンバランスの変更である」(225)。「わたしたちが…必要としているのは、市場とその他すべての物とのあいだの…アンバランスに対峙することなのだ」(226)、と。

21) ホックシールドは、自由市場政策(規制緩和、民営化、公的サービス削減)を促進して家族を弱体化させている当の新自由主義者が、強い家族を望む矛盾を指摘する(225)。

22) 別の箇所ではこうもいう。「近年では、政府も資本主義も(国家は福祉改革をつうじて、資本主義は臨時労働力をつうじて)以前の約束から後退してきた。そのかわりに、両者はケアのポールを私的領域に投げ返してきたが、そこではそれを受け止める家庭はほとんど存在しない」(Hochschild, 2003:2)、と。

がいかにしてケアの担い手を現在確保するかという点が彼女の関心に入っていないことも問題であるが、いまはその点は措いて、彼女が焦点をあてる中流階級共働き家庭を中心にすえよう。そのばあいでも彼女は最近40年間の新自由主義のもとで市場の支配が加速してきて規制緩和、民営化、政府サービスの削減がおこなわれてきた点を強調するのだが（9-10）、この状況下でいかに「親密な生活」の市場的代替物を抑制し公的代替物を拡大するかについての自身の構想を明確に提示していない。さらにいえば、長期的に市場的代替物の縮小をめざすとすれば、そのために新自由主義的労務管理を緩和させるか、市場的代替物の縮小分だけ諸政府や公共機関やコミュニティの提供物をふやさなければ家族は維持できないが、それらの方策についても未回答である²³⁾。

[3] 第2は、市場的關係と非市場的關係について、いくつかの事例で彼女が垣間みせる2つの關係のバランスをとる、あるいは両者の融和をはかる、ミクロ的方法である。

ある面では、彼女は市場サービスによる「親密な生活」の代替を不可避とみている。彼女はのべる。2020年までに老人が6人に1人に増大すると予測され、女性雇用の増大によって在宅の母親が稀になる〔つまり、老人をケアする家族介護人がいなくなる—鈴木〕ので、またグローバルな移民が介護人を供給するので、家族の福祉は、村の「ただやるだけ」を、市場の絆へと織り込む技術にかかることになる（181）、と。家族の福祉が村の「ただやるだけ」を市場の絆へと織り込む技術にかかる、という表現はわかりにくいだが、おそらくそれは市場的關係と共同体的關係との中間的形態の追求を意味すると思われる。

23) ただしボランティア活動への期待はみとれる。彼女は、学校の落ちこぼれの救済をひきうけるというライフコース、アメリカは貧しい老人に寄り添う人びとを必要とするというケアマネージャー、子供ガン病棟でギターをひくというギタリスト、に言及する（226）。条件さえ整えばボランティア活動の志望者はいる、といたいのであろう。だがそれは望ましい将来社会の構成要素として明確に提示されていない。

この見方が示されるのが、先にみた（本稿、422-424頁参照）クライアントのキャリアウーマン（ジョアン）と、彼女が父親のケアのために雇ったネパール人女性介護士（ノーラン）の関係においてである。彼女らの関係は市場的關係だったが、介護士が市場的關係を離れて父親を親身になって介護してくれる良好な関係であり、市場的關係と「ただやるだけ」の共同体的関係の中間にある関係だった。彼女らの関係は「友情をともなう雇用」「遊びをともなう労働」であり、この関係が示していたのは「市場の配列と村の「ただやるだけ」との、公正で思いやりのあるバランス」（180）だったとされる。

『アウトソースされる自己』の結章でもこの点は確認できる。おばのエリザベスは、ホックシールドがやっとみつけた同居してくれる心優しい介護士につきそわれ、「村と市場との混合」（227）の介護を提供されて、かつての生活と楽しさを取り戻して98歳の生を終える。この結末にも、共同体的でありかつ市場的でもある両者のバランスのとれた混合的サービスが望ましいというホックシールドの立場がうかがえる。

家族の福祉はこうした混合的サービスをつくりうるか否かにかかる、とホックシールドは主張しているかにみえる。しかしすでに論じたように「この関係は複雑で、おそらく稀だった」（181）。ある研究では、介護士とクライアントの雇用関係で「真のパートナーシップ」を形成していたのは5人に1人で（180）、またたとえばナニーとクライアントの関係では、ナニーが雇用契約書の作成をもとめると彼女らが解雇されさえする危うさをはらんでいた（178）。それでも彼女は、市場的關係と共同体的関係の中間的形態に期待をかけているように思える。

しかし彼女は、この中間的形態にあるサービス提供の成立条件に言及しない。そうである以上、この関係は偶然的にのみ成立する理想的関係の提示にとどまるのではないか。

むすびにかえて

冒頭で指摘したように、高橋洋児は現代資本主義における人間生活の丸ごとの「商品経済漬け」を指摘し、ブレイヴァマンはテイラー化した労働過程がうみだす「普遍的市場」が家族とコミュニティ関係を衰弱させる事実を強調し、アグリエッタは、フォード主義的労働過程がそれに対応する新しい消費様式を創造する点を論じた。いずれも非市場的關係にたいする市場的關係の支配や、市場による人間生活の浸食作用を問題にしたといえる。

しかしいうまでもなく、市場による人間生活の浸食作用は、現代の資本主義社会で暮らす人びとから切り離されて、彼/女らから独立に存在する客観的作用なのではない。市場の浸食作用は、この浸食を主体的に担う具体的諸個人なしには存在しえない。

では、市場による共同体的關係の浸食ないし分解を押し進める主体は、この過程をどのように受け止めてそれを推進しているのか。そこを具体的に見極めなければ分解の実態も、この分解への対応策も理解できない。ホックシールドが考察を試みたのはこの点だった。しかも彼女は市場的關係による共同体的關係の分解作用を、物のやりとりとしての商品交換關係ではなく、人間と人間との市場的接觸過程が直接に前面に出てくる対人サービス取引に焦点をあてて考察した。インタビューによる生身のプロバイダーとクライアントの声の聞き取りをつうじて、「親密な關係」の市場化を、当事者たちがどのように具体的に考えかつ感じて遂行しているのかを描き出そうとした。彼女の考察の意義はまさにこの点にある。

たしかに、彼女の考察は本稿が指摘したような、分析上の不備や方法上の欠陥や考察の不十分さを残してはいる。にもかかわらずそれは、市場〈対〉共同体的對立と、それを具体的に受け止める当事者たちの立場を考察するさいの今後の研究上の足がかりをあたえている。このゆえに望ましい将来の生活形態を視野に収めつつ、賃労働關係に立脚する当事主体に焦点

をあてた、市場による生活過程の分解作用の発展的研究が期待されるのである。

引用文献

- Hochschild, Arlie Russell (2003) *The Commercialization of Intimate Life: Notes from Home and Work*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- (2012) *The Outsourced Self: What Happens When We Pay Others to Live Our Lives for Us*, New York: Picador.
- アグリエッタ, ミシェル (2000) 『増補新版 資本主義のレギュレーション理論—政治経済学の刷新』(Aglietta, Michel (1997) *Régulation et crises du capitalisme*, Éditions Odile Jacob), 若森章孝・山田鋭夫・大田一廣・海老塚明訳, 大村書店。
- ブレイヴァマン, ハリー (1978) 『労働と独占資本—20世紀における労働の衰退—』(Braverman, Harry (1974) *Labor and Monopoly Capital: The Degradation of Work in the Twentieth Century*, New York: Monthly Review Press) 富沢賢治訳, 岩波書店。
- ホックシールド, アーリー・ラッセル (1990) 『セカンド・シフト—アメリカ共働き革命のいま—』(Hochschild, Arlie R. (1989) *The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home*, New York: Penguin Books) 田中和子訳, 朝日新聞社。
- (2000) 『管理される心—感情が商品になるとき—』(Hochschild, Arlie R. (1983) *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, Berkeley, California: University of California Press) 石川准・室伏亜希訳, 世界思想社。
- (2012) 『タイム・バインド—働く母親のワークライフバランス—』(Hochschild Arlie R. (1997) *The Time Bind: When Work Becomes Home and Home Becomes Work*, New York: Metropolitan Books) 坂口緑・中野聡子・両角道代訳, 明石書店。
- ウォラースタイン, ジュディス・S/サンドラ・ブレイクスリー (1997) 『セカンドチャンス—離婚後の人生』(Wallerstein, J.S. and S. Blakeslee (1989) *Second Chances: Men, Women, and Children A Decade after Divorce*, New York: Ticknor & Fields, Inc.) 高橋早苗訳, 草思社。
- 河村哲二 (2003a) 『現代アメリカ経済』有斐閣。

——— (2003b) 「世界的インパクトの源泉としてのアメリカ—戦後パックス・アメリカナの変容と「グローバル資本主義」の出現—」, SGCIME編『世界経済の構造と動態』, 『マルクス経済学の現代的課題』第I集第1巻I, 御茶の水書房。

鈴木和雄 (2012) 『接客サービスの労働過程論』御茶の水書房。

高橋洋児 (1988) 『現代資本主義のトポロジー』御茶の水書房。

The Marketization of “Intimate Life”:
Adaptation and Resistance

Kazuo SUZUKI

《Abstract》

The purpose of this paper is to examine the influences of outsourcing “intimate life” on people, which are explored by A.R. Hochschild in her book, *The Outsourced Self* (2012). At the outset, I examine three main points of her study, which are micro driving forces towards the marketization of “intimate life”, distortion and limitation of “intimate life” via the marketization, and forms of people’s adaptation for, and resistance to, the imminent marketization. By doing so, three questions are raised in Hochschild’s study. First, by focusing mainly on self-employed service providers, not on service wage workers, she fails to grasp the severer effects of the outsourcing of “intimate life”. Second, the simple dichotomy between market and non-market brings about the false understanding that the non-market world is all good, while the market world is all bad. Third, ambiguity about prescriptions presented as protection against the market prevents the depiction of a desirable future society. Finally, I still evaluate her study as significant since it indicates perspectives on future research about the marketization of “intimate life”.